

紀国寺慧浄の『法華經續述』考(2)

——韓国の現存本をもとに——

金 炳 坤 (慧鏡)

一、研究の意義

敦煌を中心とした西域出土の文献は、全世界に凡そ五万点あるとも言われているが、筆者の現在までの調査によれば、このなかに法華章疏は約0.2パーセント点数にして百点ばかりを数えるに過ぎない。

もちろんこのなかには既知の法華章疏、すなわち、最大点数を有する慈恩基(CE.632-682)の『妙法蓮華經玄贊』〔題記のみの写本を含めて二十五点ほど・以下、『玄贊』〕をはじめ、不明史料の年代・系統を調査・分類するための基準として用いられる吉藏(CE.549-623)の『法華義疏』〔類同・類似を合わせて十点ほど〕、慧沼(CE.648-714)の『法華玄贊義決』〔台東区立書道博物館所蔵中村不折旧蔵禹域墨書【099】〕、天台宗章疏としては唯一となる湛然(CE.711-782)の『法華玄義釋籤』〔旅順博物館蔵トルファン出土漢文仏典[LM20_1520_15_07]〕などが含まれているが、これらは全体のなかの四割にも満たず、その他ほとんどは作者未詳・不知題の写本である。

筆者の研究テーマである「法華章疏の研究」では、『法華經』の注疏類を撰したことで、歴史上にその名を残していながらも脚光を浴びることなく、いつの間にか退色してしまった彼らの『法華經』に対する思いを再び蘇らせ、これらを法華教学史の展開の上に正しく位置付けることによって、新法華教学史の大系を示すことをその目的とする。

とりわけ、本研究では、これまでに中国・日本撰述の法華章疏の陰に隠れ、等閑視されていた海東撰述の法華章疏並びに長年ベールに包まれていた西域出土の法華章疏を顕在化せしめることにその主眼を置いている。

二、『妙法蓮華經續述』の現存状況について

さて、隋から唐にかけて長安の紀国寺において活躍した慧浄(CE.578-645?)は、九世紀になると中国における『法華經』注釈の四大家の一人として数えられるようになる。

彼の著した『妙法蓮華經續述』(以下、『續述』)十巻は、長らく散逸したと思われていたが、本誌第15号の拙稿「紀国寺慧浄の『法華經續述』考(1)——新発見の史料をもとに」(以下、前稿)において明らかにしたように、『續述』は現在、韓国にその一部が刊本〔①宝物 第206号・②宝物 第1468号〕として現存している。

また筆者は、スタインコレクションの敦煌文書のなかから『續述』を適宜に抄出している写本〔③[S.6494]・『妙法蓮華經論義』(以下、『論義』)]を発見し、前稿ではその一部(全495行中243行まで)の翻刻を公開した。

当該写本、すなわち『論義』は、未だその存在の確認されていない『續述』の巻三・四(「方便品」第二)をも抄出しているため、『論義』の発見により『續述』の十巻のうち、六巻については、概ねその内容を知ることができるようになったのである。

以下、『續述』の現存状況を【表1】にまとめておく。

【表1】『續述』の現存状況

『續述』	冊	一		二		三		四	五
	巻	一	二	三	四	五	六	七・八	九・十
	品	一		二		三	四～六	不明	不明
有無(状態)		① 存(上)		欠		② 存(下)		欠	欠
『論義』				③ 存					
総合									

- ① 松廣寺聖宝博物館所蔵『妙法蓮華經續述』巻一・二 — 「序品」第一。1963年1月21日に韓国の宝物 第206号に指定されている。画像データとテキストデータとが「国家記録遺産ホームページ」[<http://www.memorykorea.go.kr>]に公開されている。
- ② 松廣寺聖宝博物館所蔵『妙法蓮華經續述』巻五 — 「譬喩品」第三、同巻六 — 「信解品」第四～「授記品」第六。2004年に発見され、2006年4月28日に韓国の宝物 第1468号に指定されている。筆者は2010年5月26日に画像データを入手・翻刻掲載許可を取得している⁽¹⁾。
- ③ 大英図書館所蔵スタインコレクション6494『妙法蓮華經論義』 — 刊本の巻二「序品」第一の末尾から巻五「譬喩品」第三の半ばまでに該当する。

しかし、散逸の四巻(巻七～十)についても前稿において指摘したように、同じくスタインコレクションの敦煌文書で、『續述』の末註である『法華問答』(T.85 no.2752・以下、『問答』)や九世紀頃までの法華章疏を網羅的に引用している栖復(CE.-879-)の『法華經玄贊要集』(SZ.34 no.638・以下、『要集』)などに多数の引用が確認できるため、これらの史料をもとにある程度までは輪郭を掴むことができると考えられる⁽²⁾。

本稿では、前稿に続き『論義』の「譬喩品」第三以下最後(244行から495行)までの翻刻を掲載し、『續述』との対応箇所は註に明記することによって、『論義』の『續述』に対する抄出態度を窺うとともに、『論義』と対応関係にある『續述』巻五の欠損・破損箇所については、『論義』の抄出文例をはじめ、經典・論書からの引用・援用文例をも調査・対照し、これを補うことにする。

〈凡例〉

- ・翻刻史料 — 本文の『論義』は『敦煌寶藏』第47冊に収録(422-434頁)されている影印を、また、註の『續述』は発見当時に撮影された画像データを使用した。
- ・翻刻原文 — 漢字は既刊書との比較検討の便宜をはかり可能な限り旧字体を使用した。採用漢字は〈付録〉「異体字・旧字体一覧」(異体字・旧字体→採用漢字)を参照されたい。なお、採用漢字の上付きの数字は『大漢和辞典』(巻数—各巻毎の頁数)に対応する。
- ・翻刻原文の註は該当語の最初に付した。なお、翻刻原文に用いた符号は以下のとおり。

「P.26_495 (25)」 — 「P.26 — 影印の頁数(各頁の*印の付された行が頁の始まり)、_495 — 全495行中495行目、(25) — 行の文字数」 □ — 欠損・破損のために判読できない文字。■ — 黒塗りのために判読できない文字。
○ — 判読できない文字(異体字など)。□ — 筆者による欠字の補填(欠損・破損のために判読できない箇所を経典・論書など諸史料をもとに補った箇所)。
〔以下『論義』のみ〕 […] — 筆者による誤字・脱字の補填。{…} — 書写・校閲者による添字 レ — 書写・校閲者による返り点。々 — おどり字(補って記した)。
①などの丸囲い英数字は、『妙法蓮華經憂波提舍』(T.26 no.1519・以下、『法華論』)との対応関係を示す。㊦などの丸囲い漢数字は、『論義』における問答形式の記述を示す。
- ・翻刻原文に用いた下線は、経典・論書からの引用・援用箇所を示す。とくに、引用・援用箇所の調査は、慧浄の現存書・『要集』・『問答』(『問答』の引用文中、冒頭に付した(A/B-C)は、全103問答中、第A番目の/、全28品中、第B番目品の第C番目問答という意味)に重点をおき、対応箇所の一文は註に明記した。なお、『論義』・『續述』の句読点は、筆者の任意による。

〈略語〉

- CE. Common era (共通年代)
- T. 『大正新脩大藏經』
- SZ. 『新纂大日本續藏經』
- S. 大英図書館所蔵スタインコレクション
- P. フランス国立図書館所蔵ペリオコレクション
- 北図 北京図書館 (中国国家図書館) 蔵敦煌遺書
- 上図 上海図書館蔵敦煌吐魯番文獻
- 龍大 龍谷大学図書館蔵大谷探検隊将来敦煌古写經
- 出口 出口常順蔵トルファン出土仏典断片
- Kor.206 韓国の宝物 第206号『妙法蓮華經續述』卷一・二
- Kor.1468 韓国の宝物 第1468号『妙法蓮華經續述』卷五・六
- 「r (recto)」綴じ本の右側の頁 (表) ⇔ 「v (verso)」

三、譬喩品

P.13_244(09) : ⁽³⁾妙法蓮[華]經譬[喩]品第三

P.13_245(22) : 自下開宗。廣明一乘。論主括節大申兩意。一括十對治。廣

P.13_246(24) : 破一乘郭。二括十無上。廣立一乘之道。大障破大道立。大解成

P.13_247(25) : 大行起。如此則大理定大教弘大記圓大事顯。故曰。諸佛唯以一

P.13_248(24) : 大事因緣故[出]現於世。十對治者。謂七譬三平等也。⁽⁴⁾七譬者。
爲破

P.13_249(24) : 七種煩惱人增上。^{①(5)}第一火宅譬。破求勢力人。倒求增上慢。
求勢

P.13_250(23) : 力人。是欲界凡夫人天勝境界寶龜弊非樂爲樂。故名倒求。

P.13_251(23) : 火宅譬中。先令戲三。拔其苦後令入一與其大樂故爲對治。

- P.13_252(23) : ②⁽⁶⁾第二窮子譬。破求聲聞人。是聞聲種性人。是如來(方)便於一
- P.13_253(23) : 開{三}。自下謂乘上與佛等故名一向倒。窮子譬中。初蒙少價
- P.13_254(21) : 不悟昔貧。後獲大寶方知今富。故爲對治。③⁽⁷⁾第三藥草譬。
- P.13_255(25) : 破求大乘人。一向增上慢人。大乘人。是菩薩種性人。教雖一味等
- P.13_256(26) : 被三根^[捨]舍立權三而偏執一故亦名一向倒。藥草譬中。一味之雨三
- P.14_257(20) : 草同潤令知根別破其一迷。故爲對治。④⁽⁸⁾第四化城譬。
- P.14_258(23) : 破有定人。實無而有增上慢。有定人。是得定凡夫有漏世定
- P.14_259(22) : 實非涅槃。[於中妄執]生涅槃想故名實無[而]有。化城譬中。立化滅化令[入令]
- P.14_260(21) : 出。指{近}遠。指破昔破今。故爲治對。⑤⁽⁹⁾第五繫珠譬。破無定
- P.14_261(24) : 人。散亂增上慢。無定人。是退菩薩性[人]。習道不進忘昔大善[脩]空耶
- P.14_262(21) : 僻。故名散亂。繫珠譬中。示其衣珠令其記憶。教入三昧
- P.14_263(20) : 令憶昔善。故爲對治。⑥⁽¹⁰⁾第六解珠譬。破集功德人。取非
- P.14_264(22) : 增上慢。有功德人。是有學聲聞人。斷少煩惱故有功德。大
- P.14_265(21) : 乘應^[取]取不取反耳小乘。故名取非。解珠譬中。前賜田宅
- P.14_266(16) : 後與明珠。前賜小果後與大樂。故爲對治。
- P.14_267(24) : ⑦⁽¹¹⁾第七醫師譬。破不集功德功人。不取一乘增{慢}_[レ]上。無功德人。是
- P.14_268(23) : 三乘種性人。說一乘不肯脩習。猶醫留妙藥子不服之。然則
- P.14_269(22) : 醫設權方癡子方服妙藥。佛現滅度鈍性方脩一乘。故爲
- P.14_270(20) : 對治。⑫⁽¹²⁾三平等者。爲破無煩惱人三種顛倒不信。①⁽¹⁾—[乘]平

P.14_271(23) : 等破信種種乘異。故與聲聞授記。唯一乘無有二乘。^②[二]世間

P.14_272(21) : 涅槃平等。爲破信世間涅槃異。故多寶入涅槃世間[涅槃]平等

P.14_273(22) : 故。^③三身平等。爲破信自身他身[異]。故多寶入[涅槃]已復出示現。自

P.14_274(21) : 身他身法身平等故。案約二乘。說大乘平等。顯一切諸

P.14_275(22) : 佛同意。約世間。說涅槃平等。顯一切諸佛同體。約自身他

P.14_276(21) : 身。說身平等。顯一切[諸]佛同業。由同意故與聲聞授記。由

P.15_277(22) : 同體故一切世間本來自性解脫。故多寶息化入[於]涅槃。由同

P.15_278(23) : 業故多寶{入塔}多寶入已復出。顯諸佛同化同證授記。同[意]顯

P.15_279(22) : 應身。同[體]顯法身。同業顯化身。⁽¹³⁾十無上者。^①[一]種子無[上]。雲雨譬中

P.15_280(24) : 示現。^②二脩行無上。大通智勝如來現示。^③三增長力無上。化城示

P.15_281(21) : 現。^④四令解脫_[レ]無。繫珠示現。^⑤五淨土無上。寶塔示現。
^⑥六

P.15_282(21) : 說無上。解珠示現。^⑦七教化力[無]上。踊出菩薩示現。^⑧八菩提

P.15_283(21) : 無上。壽量示現。^⑨九涅槃無上。醫師示現。^⑩十勝妙力無上。

P.15_284(22) : 餘殘脩多羅示現。⁽¹⁴⁾案時雨既降。則草木滋^[著]前法水亦流。[即]道

P.15_285(24) : 芽便發故。^①以雲雨譬示現。種子無上。然彼之與我雖下種一時。

P.15_286(23) : 而津途致果。則道成懸隔所[以]。須申已行以厲彼心故。^②次大通

P.15_287(24) : 如來示現。脩行無上。我既有能須令彼進所以。立化滅化進
[進]

P.15_288(24) : 遠故。^③次化城示現。增長力無上。彼既可進須^[反]返其迷所[以]。
示其衣

P.15_289(22) : 珠教入三昧故。^④次繫珠示[現]。令解無上。彼既得解其心稍淨。

P.15_290(23) : 隨其心淨則佛土淨故。^⑤次現塔示現。淨土無上。既入淨土則[堪]

P.15_291(22) : 聞大法故。^⑥次解珠示現。說無上。佛有堪[能]受者。必益故。

^⑦次踊

P.15_292(23) : 出示現。教化力無上。物謂如來成佛甫述何得。門徒道亞玄

P.15_293(21) : 極。若不遠申靈算無以祛彼情疑故。^⑧次壽量示現。菩提

P.15_294(22) : 無上。或聞佛壽靈長便生怠慢所以。權須唱滅以告難逢

P.15_295(22) : ^⑨次[故]。醫師示現。涅槃無上。九事得成並由經力具須讚述

P.15_296(23) : 令物鑽仰[故]總。^{⑩(15)}餘殘多。脩羅示現。勝妙力無上。餘殘二義。一上

P.15_297(23) : 殘。謂十治九無上。所不攝處。即法師品。勸持品。安樂[行]品。廣說[法]

P.16_298(23) : 勝妙力。二下殘。即分別品。隨喜品。法師功德品。不輕菩薩品。

P.16_299(23) : 廣說法勝妙力。此十治十無上。是一部經意。故舉其宏^[別]○示

P.16_300(26) : 其大略。此下十八品。^{(16)[文]}大開二節。初十四品廣顯經宗。後四品廣明經

P.16_301(24) : 用。開者。爲轉[其]執。廣申破二明一。顯法授人。明用者。爲令其仰。廣

P.16_302(21) : 說生福長道。能多能速。顯宗。初七品約解授記。是破聲

P.16_303(23) : 聲聞執。後七品約行授記。教。是菩薩道。⁽¹⁷⁾解初四品授上根人

P.16_304(23) : 記。多是^④應化聲聞。後三品授中根人記。多是^③退已發心聲聞。

P.16_305(23) : 下根人者。[多]是^①決定性聲聞。此會不得記。餘處與記。如化城品

P.16_306(23) : 說。我於餘^[國]處。更有異名。是人於彼。而得滅度。上根四品。譬喻

P.16_307(21) : 品開解。信解品領解。藥草品述解。授記品授解。言譬喻

P.16_308(23) : 者。譬是類名。喻是曉義。以其所悟。曉其所迷。故稱譬{喻}。
品中

P.16_309(23) : 先說。身子領解。仍開別記之端。後說。餘人未解。即生通記
[之]譬。

P.16_310(22) : 初即譬緣起。後即正譬義。⁽¹⁸⁾爾時舍利弗踊躍觀喜。^[歡]即從坐

P.16_311(22) : 起合掌瞻仰尊顏者。⁽¹⁹⁾避席者。執恭所以起而合掌。目擊者。

P.16_312(24) : 在道所以瞻乎佛面。^[存]而曰佛言至得未曾有者。^[白]心雖悅而旦恭

P.16_313(23) : 身_レ恭。口未宣而解尚隱。啓尊以述_レ自之辭。即是聞此法音。
得

P.16_314(23) : 未曾有[也]。所以者何至授記作佛者。⁽²¹⁾領[開]一乘法也。而我
等不豫

P.16_315(21) : 斯事。甚自感復。^[悔]失於如來無量知見者。⁽²²⁾彼激獲大寶。而

P.17_316(21) : 我獨懸隔。既喪明復失果。故[感]激而自復也。^[悔]世尊。我常獨

P.17_317(22) : 處山林樹下。若坐若行。每作是念者。⁽²³⁾山林幽寂可以來思

P.17_318(20) : 行坐沈吟自多動慮故宴坐[經]行之處持爲發疑之所。

P.17_319(22) : 我等同入法性者。⁽²⁴⁾身子初逢馬宿問_レ三諦。而獲初果。次因[長]

P.17_320(22) : 抓悟一言。而階上聖。自是而後歷聞方等。屢踐空門未_レ雖
^[成]

P.17_321(23) : 顯授。於法財抑亦同入法性矣。[云]何如來以[小]乘法而見濟度
者。

P.17_322(24) : ⁽²⁵⁾身子志狹事小入同得異酌海既不測其淺深。而請尊授有優
^[謂]

P.17_323(22) : 劣不省已過各佛賜偏也。是我[等]各非世尊也。^[智]⁽²⁶⁾向者審忘各
^{[妄][智]}

P.17_324(22) : 於佛。三思覆察失在於我。故非世尊也。所以者何。[若]我等待

P.17_325(22) : 說所{因}。[所]以者何。若[我等]待說所因至至。必以大乘而得
度脫者。

P.17_326(24) : ⁽²⁷⁾[待說所因]者。待者{謂}停待。因謂大因謂大因{乘}也。⁽²⁸⁾若
我得說[大因]。不證小果。[非]但
^[得]

P.17_327(19) : 同入實亦同得也。然我等不解方便隨宜所說者。

P.17_328(20) : ⁽²⁹⁾悉權教也。初聞佛法遇信^[レ]便受者。迷權行也。思推取

P.17_329(22) : 證者。迷權思^[果]也。由迷小法不待大因。入同得異^[各]各自^[是]我也。

P.17_330(20) : 世尊。我從昔來終日竟夜每自剋責者。⁽³⁰⁾每自剋已責

P.17_331(21) : 心。累日連宵。憂多迷重。而今從佛聞所未聞未曾有法。

P.17_332(20) : 斷諸疑悔者。⁽³¹⁾既稟一道理祛百滯也。身意泰然快得

P.17_333(21) : 安隱者。⁽³²⁾泰通也。快樂也。憂悔塞心所以不泰疑搖其慮

P.17_334(17) : 是故不安。今既悔蕩疑余^[除]所以身通意樂也。

P.18_335(24) : 今日乃知眞佛^[是]佛子。從佛口生從法化生。得佛法分者。⁽³³⁾眞
是

P.18_336(22) : 佛子者。受^[父]體分信心種子從眞流。從佛口生者。受父教訓

P.18_337(23) : 得聞慧也。從法化生者。[生]^[含]在父舍入思慧也。得^[佛]法分者。

受父付

P.18_338(22) : 囑行脩慧也。⁽³⁴⁾我本着耶^{[著][邪]}見。爲諸梵志師。世尊知我心。拔耶^[邪]

P.18_339(21) : 說涅槃。⁽³⁵⁾我本着耶^{[著][邪]}見者。受^[邪]教爲外道弟子時。爲外道弟

P.18_340(21) : 子時。爲諸梵志師^[者]。轉耶^[邪]說涅槃道爲外道師主時。世尊

P.18_341(22) : 知我心者。耶^[邪]機動善根成熟時。拔耶^[邪]說涅槃者。耶^[邪]病破解

P.18_342(22) : 脫生死生時。此明舍利弗初爲外道刪闍耶弟子。其師沒

P.18_343(21) : 後攝彼徒衆。佛誡馬宿比丘曰汝見非常之人。勿廣說

P.18_344(19) : 法馬宿後逢舍利^[弗]。略說三諦。彼獲初果。此^[レ]卽偈義。

P.18_345(20) : ⁽³⁶⁾初聞佛所說。心中大驚疑。將非魔作佛。惱亂我心耶

P.18_346(22) : 者。⁽³⁷⁾初聞佛所者^[レ]說。創稟示明一之宗。心中大驚疑者。撇忤

P.18_347(21) : 破二之說。將非魔作佛者。謂魔化^[形]刑^[目]以自^[レ]或^[惑]。惱亂我心

P.18_348(21) : 耶者。謂魔變^[說]以亂心。⁽³⁸⁾然舍利弗。今當復以譬喻更明此

P.18_349(20) : 義。諸有智者以譬喻得解者。⁽³⁹⁾智者是四大聲聞等。彼

P.18_350(21) : 雖未能忘言以悟旨。或可虛心以待譬。將欲爲其說譬

P.18_351(21) : 義故。[先]以者^[レ]智擊讀之。⁽⁴⁰⁾此譬破求勢力人。倒求增上慢。

⁽⁴¹⁾先

P.18_352(19) : 立火宅即慙病。後立三車即救命。^[病]⁽⁴²⁾舍利弗。若國邑

P.18_353(21) : 聚落^[落]有大長者。⁽⁴³⁾如來國爲大處。邑爲中處。聚落爲小處。

P.18_354(22) : 此譬如來三田。聚落^[落]說法田。以三千大千世界爲境界。邑

P.19_355(23) : 譬神法田。以十^[通]陪^[倍]說法^[慧]田爲境界。國譬智法田。以一切世界爲

P.19_356(21) : 境界。其年^[衰]朽邁者。⁽⁴⁴⁾如來至法會^[レ]華年已七十五故朽邁。

P.19_357(22) : 多有田宅者。⁽⁴⁵⁾田^[宅]譬九定。宅譬三空。發惠田^[衰]如。三空鎮神如宅。

P.19_358(19) : 此是功德田宅。非火宅也。及諸童僕者。^[備]⁽⁴⁶⁾如來四僧

P.19_359(24) : 其家廣大者。⁽⁴⁷⁾家^[宅]辟衆生本識。變異作{三}界爲宅^[即]火。唯有一門者。

P.19_360(24) : ⁽⁴⁸⁾謂一佛教門。諸外道門不能出宅^[火]火。多諸人衆。一百二百乃至

P.19_361(28) : 五百^[人]者。⁽⁴⁹⁾譬五道種子。五道以十使爲通因。十業^[道]爲別因。十使一一起十業。

P.19_362(27) : 即^[有]百業。一道有一百。五道即五百也。止住其中。⁽⁵⁰⁾五道種子。冥伏在本識

P.19_363(23) : 中也。堂閣朽故牆壁^[壁]頽落。柱根腐敗棟^[梁]梁傾危者。⁽⁵¹⁾棠閣譬頭

P.19_364(21) : 頂。牆壁譬皮肉。柱根譬骨節。梁棟譬筋脉。堂閣朽故者。

P.19_365(21) : 髮白面皴。是頭老相。牆^[壁]壁墮落者。肉消皮緩。是皮老相。

P.19_366(22) : 柱根腐敗者。脚弱脊^[脊]嘔。是骨^[老]者相。梁棟傾危者。筋舉脉縮。

P.19_367(17) : [是]筋老相。色身既老。名身亦變。即五陰俱老也。

P.19_368(24) : 周匝俱時欬然火起焚燒舍宅者。⁽⁵²⁾因四苦生三毒。四苦燒人身

P.19_369(23) : 三毒燒人心。故曰。焚燒舍宅也。長者諸子。若十^[廿]或至^[卅]。在

P.19_370(27) : 此宅中者。⁽⁵³⁾三乘種性亦在本識中。三乘各^[行]十善各以十善。

而成性故各^[持]

P.19_371(26) : 言十也。長者見是大火從四面起者。⁽⁵⁴⁾涅槃經云。⁽⁵⁵⁾以四面譬四山。生老

P.19_372(27) : 病死。生爲東面。老爲南面。病爲西面。死爲北面。是以衆生重擔。故以譬

P.19_373(24) : 山。謂見子三毒從四苦發也。卽大驚怖者。⁽⁵⁶⁾見火怛愕曰驚畏子

P.19_374(24) : 被燒爲怖。[驚]譬如來大智。怖譬如來大悲也。而作是念。我雖能於

P.20_375(25) : 此所燒之門安隱得出者。⁽⁵⁷⁾衆生不信佛教之門卽滅。故曰。所燒我

P.20_376(23) : 昔已信故今得出也。[而]諸子等。於火宅內樂着嬉戲。不覺不知

P.20_377(23) : 不驚不怖。⁽⁵⁸⁾不覺生苦。不知老苦。不驚病苦。不驚死苦。⁽⁵⁹⁾我手_レ身

P.20_378(23) : 有力。當以衣_{〔衣〕}。若以机_{〔机〕}案。從舍出之者。⁽⁶⁰⁾身譬如來定力。手譬

P.20_379(26) : 如來惠力。依禪定發五通力。^[衣]^[机]依_{〔衣〕}械_{〔机〕}譬_{〔願〕}卅二相。机_{〔机〕}案_{〔願〕}譬平等大惠。
[依]定力

P.20_380(26) : 現_{〔願〕}卅二相令其衆生信。卽[以]定力出之。依惠力讚平等大惠令其衆生

P.20_381(25) : 智。卽[以]惠力出之。是舍唯一[門]。而復狹小者。⁽⁶¹⁾無明羅刹經說。一門謂

P.20_382(27) : 法性門。案唯一佛教立法性。破人性故言一門。三藏教中。不令二乘廣

P.20_383(26) : 度一切故言狹。不令求大菩提故言小。^{③(62)}問。設三車以誘三根。言三不

P.20_384(25) : 言其一。[開門]以出三子。[卽]言一不言其三何也。答。[門]可

貴賤同行。宜言其一。

P.20_385(21) : 車則尊卑別載。所以言三。諸子幼稚未有所識。戀着戲

P.20_386(25) : 處者。⁽⁶³⁾學道之年既從覆郭之情猶重癡故。仍昏二乘之教愛故

P.20_387(24) : 尚沈五境之因。或當墮落爲火所燒者。⁽⁶⁴⁾投入夜光。鮮不案劍。

爲[說]

P.20_388(23) : 妙法。多生謗心。謗心亦起大坑即入。故曰。[爲火]所燒。父雖
憐愍者。

P.20_389(23) : ⁽⁶⁵⁾心悲欲拔之。善[言]誘喻者。口悲欲引之。樂着嬉戲處者。由
愛[多]。不

P.20_390(25) : 不肯信受者。由見重。不驚不畏者。⁽⁶⁶⁾見無明。了了無出心者。是
懈怠。

P.20_391(25) : 亦復不知何者是[火]。⁽⁶⁶⁾三毒爲火。云何[者]爲舍者。⁽⁶⁷⁾五陰養舍。
云何爲失者。

P.20_392(25) : 不知三苦所逼爲失。但東西走戲視父而已者。東西譬苦集。南北

P.20_393(26) : 譬滅道。此出波沙。⁽⁶⁸⁾子論苦集。即是走戲東西。父證滅道可謂往
東西

P.20_394(24) : 南北。未能逐。隨但可顧瞻而已也。⁽⁶⁷⁾此舍已爲大火所燒。我及
諸

P.21_395(24) : 子。若不時出。必爲所焚者。⁽⁶⁸⁾[夫]舍既被燒而癡子何不遠出。
父心顧

P.21_396(23) : 戀則同陷火災。衆生病[故]菩薩[亦病]也。我今當設方便。令諸
子等得

P.21_397(24) : 免斯害者。⁽⁶⁹⁾欲構三車之術。令絕五痛之災。父知諸子先心各有

P.21_398(24) : 所好者。⁽⁷⁰⁾更觀其過去根[欲]性也。爾時諸子聞父所說。珍玩之
物者。

P.21_399(24) : ⁽⁷¹⁾譬[受]三乘教。適其願故者。譬稱三乘機。心各勇銳者。譬彼

心進精

P.21_400(22) : 互相排^[い]推者。譬彼身精進。競共馳走者。[譬]登八正之路。

爭出

P.21_401(25) : 火宅者。譬免^[五]痛之災快乎哉。慈慈父之祕乘^[榮]於斯^[効]方^[効]郊矣。

皆於四衢

P.21_402(24) : 道中者。⁽⁷²⁾譬入四禪諦觀。露地而坐者。譬入無學心學地。有^[聖]郭^[聖]可^[言]言

P.21_403(26) : 覆。無學地。無郭故言露地。所作已辦。故言而坐。無復郭礙者。
一切或

P.21_404(22) : 盡。其心泰然者。菩薩病愈也。⁽⁷³⁾羊車鹿車^[時]牛車^[時]願垂賜與者。
諸子

P.21_405(23) : 願未願意。所以具索三車也。⁽⁷⁴⁾爾時長者。各賜諸子等一大車。

P.21_406(26) : 以一切智爲體。⁽⁷⁵⁾智度論曰。一切智爲大車。八正道行入涅槃。
其車高

P.21_407(25) : 廣者。誘出二乘故言高闊度四生故言衆廣。衆寶莊校者。七寶寶

P.21_408(25) : 莊長者之車七財營如來之乘。周匝欄楯者。⁽⁷⁶⁾長者之車欄持內德。

P.21_409(27) : 脩^[補]防外侵如來之車待內衆善遮外衆^[生]○。四面懸鈴者。長者之車
四面

P.21_410(24) : 懸鈴以驚衆如來之車四辨宣令以化衆生。⁽⁷⁷⁾又於其^[上]張設幟蓋

P.21_411(22) : 者。長者幟蓋。[則]高出而下覆如來四等。高出衆聖下覆衆生。

P.21_412(27) : 寶繩交絡者。幟^[不]施絡。[則]飄鼓不定綱以珠繩。住持不動如來
[之車]。亦爾若智

P.21_413(24) : 無大誓。[則]普覆^[載]之情或動御以^[四]弘。[則]廣運之心恒定。垂
諸華纓。[華纓]垂下。[則]

P.21_414(22) : 悅物來衆四攝俯順。欣歸若林。重敷純綖安置舟^[舟]枕者。⁽⁷⁸⁾純綖

P.22_415(24) : 譬八禪舟^[舟]枕誓滅定。敷綖置枕。是眠臥之儀。入定滅心。是穌息

[之]

P.22_416(23) : 狀。[故]經說。佛究竟[臥]阿羅漢眠也。^[寢]加以白牛者。⁽⁷⁹⁾牛譬如
來大悲。[大悲]以

P.22_417(23) : 無癡善根爲體。故曰^[音]白隨遂衆生如犢子隨母故言牛。⁽⁸⁰⁾經說

P.22_418(23) : 說。隨遂衆生如犢子。[是]故號{佛}大悲牛。膚色充潔者。膚色
充潔

P.22_419(24) : 者。牛則膚色^[レ]充潔。悲[則]內潤^[直]外朗。^[形]刑體姝好者。牛則高
下應量觀

P.22_420(24) : 者。謂[之]姝好。悲則{無}怨親合機受者。謂之性正。有大筋力
者。衆生

P.22_421(25) : 以五陰爲重擔如來以四生爲重擔。牛則[引]大車而現力。悲則荷
重

P.22_422(25) : 荷擔而呈功。行步平正者。牛則不隔夷險高下一切平行。悲則不

P.22_423(26) : 限怨親[是非]一切平等觀。其疾如風者者。餘人之悲假作心而去
遲。^[緩]如來

P.22_424(25) : 之悲住自然不遠去速。又多僕從而侍衛之者。僕從而衛之者。
⁽⁸¹⁾僕

P.22_425(24) : 從謂衆魔外道。經曰。衆魔外道皆吾侍也。⁽⁸²⁾而生三界朽故火宅

P.22_426(24) : 者。⁽⁸³⁾三界。是衆生繫縛之處。^[本]大由大智故已出。今由大悲故復
生。

P.22_427(22) : 見諸衆生爲生老病死憂悲苦惱之所燒[煮]者。⁽⁸⁴⁾見[內]緣苦。生
老

P.22_428(26) : 病死在身。內爲苦緣也。入胎乃至胎名初入胎。⁽⁸⁵⁾受雜穢苦。漸
漸堅時

P.22_429(25) : 受轉熟苦。五胞開時受迫裂苦。^[大]在胎臥時。受壓迫苦。正出胎時。
受

P.22_430(24) : 迫辻苦。初胎^[レ]出時身如新瘡。手水衣觸如焚^[熟]灰灌。如刀劍解。
受

P.22_431(26) : 難忍苦。名爲生苦。⁽⁸⁶⁾變異相。名老^レ是苦。老入齒齒落。入皮
皮緩。入毛毛

P.22_432(28) : 白。入大大疎。入根根弱。入背背屈。入支支差。入身身^[則]戰
動不安。入心心則

P.22_433(25) : 掉蕩忘失。故名老苦。⁽⁸⁷⁾四大相違名是病。違自能故。能害本
[故]。不自在

P.22_434(25) : 故。是病苦。今斷名死苦。⁽⁸⁸⁾若人臨死。應往他方。非所究悉。
將離親愛

P.23_435(23) : 身屋崩倒。生大怖畏。是名死苦。生老病死。俱爲苦緣。能生憂

P.23_436(24) : 悲苦惱。卽是苦體。⁽⁸⁹⁾憂憂悲是心。苦苦惱是身者。由彼四緣生
此

P.23_437(24) : 二熱故之所燒煮。亦以五欲財利故受種種苦者。見外緣苦也。

P.23_438(26) : 五慾在身外亦爲苦緣^[故]。五欲者。可愛五塵能生慾心故名^[爲]
欲得之。則

P.23_439(26) : 資^[身]悅已故名財利爲求。此^[二]利三時受苦。或現報或生報或
後報。故曰。

P.23_440(24) : 種種苦。又以貪着^[著]追求故現受衆生苦者。⁽⁹⁰⁾見^[現]報苦也。追求
五欲。^[現在]

P.23_441(24) : 復三時受苦。覓時生勤勞苦。守時^[生怖]畏苦。失時生熱^[惱]苦。
後受^[地]獄畜

P.23_442(28) : 生餓鬼之苦者。見生報^{苦}。^[由]非法求利。故墮三塗苦^[レ]受。
⁽⁹¹⁾地獄苦有三。一熱二

P.23_443(28) : 寒三邊。熱地獄有八。一名更生。亦名更活。亦名等活。或^[獄]
卒唱生。或冷風吹

P.23_444(27) : 活。兩緣雖異令活一等。故名等活。二黑繩。先以繩拊後以斧斫。

三名衆

P.23_445(27) : 合。亦名衆槓。兩山下合以槓罪人。四名叫喚。獄卒逼趁叫喚^[呼]而走。五名

P.23_446(27) : 大叫喚。四山火起欲逃無路。故[大]叫喚。六名[燒]燃。火鐵狹
迤於中受熱。七名

P.23_447(29) : 大燒燃。山火相博鏟炙罪人。八名無間。亦名無擇。一投苦火永
無樂間。既無

P.23_448(29) : 樂間何所可擇。此八在地下重累而住。一一各有有十六圍。通七^[レ]十。合一百

P.23_449(27) : 卅六所。罪人於中受熱苦^レ惱。寒地獄亦八名。一名頽浮陀。此
云細胞寒

P.23_450(30) : 苦所切肉生細胞。二名[尼]賴浮陀。此云大胞寒風所吹^[通]遍{身
[成]胞。三名阿吒吒。臂不

P.23_451(26) : 得動唯舌得動。故作此聲。四名阿波波。舌不得動唯臂得動。故
作此

P.23_452(24) : 聲。五名嘔喉。臂舌皆不得動振氣。故作此聲。六名釐波羅。此
云

P.24_453(27) : 青華^[レ]蓮。此華葉細[肉色細]坼似此華開。七名波頭摩。此云
赤蓮華。肉色大坼似[此華]

P.24_454(28) : 開。八名分陀利。此云白蓮華。彼肉大坼似此華開。前^[二]兩身相受
名。次三聲

P.24_455(28) : 相受名。後三瘡相受名。此八在^[四]泗洲間[著]鐵圍山底。仰向居止。
罪人於中受

P.24_456(25) : 寒凍苦。邊地獄有三。一山間。二水間。三曠野。罪人於中受別
報苦。

P.24_457(29) : ⁽⁹²⁾畜生有三。一水行。二陸行。三空行。復各有三。一無足。二
二足。三多足。此九受

P.24_458(26) : 相害苦。餓鬼有三。一無財。二少財。三多財。無財有三。一炬
口鬼。火從

P.24_459(27) : 口出如野火燒樹。二針口鬼。腹大如山咽如針孔。三臭口鬼。口
爛腐臭

P.24_460(28) : 猶如糞廁。此三並不得食。故名無財。⁽⁹³⁾少財亦三。一針毛鬼。
毛長旦利行便

P.24_461(26) : 自刺。二臭毛鬼。毛長覆常自拔受苦。三大瘻鬼。咽垂大瘻常自
決噉

P.24_462(28) : 膿。而食三得少鬼不淨食。故曰少財。多財鬼亦三。一得棄鬼。
恒得祭祠所

P.24_463(26) : 棄食。二得失鬼。恒得街衢所遺食。三大勢鬼。恒得妙食由無量
餓鬼

P.24_464(26) : 所遺食化爲膿。此[三]得食。故{曰}多財。若人非法求利。生報
受。此三塗苦。

P.24_465(21) : 若生天上及在人間。受貧窮困苦愛別離苦怨憎會苦

P.24_466(27) : 者。⁽⁹⁴⁾見受後報苦。由此非法求利。於人天中。受相似果。⁽⁹⁵⁾貧
窮困苦者。追求

P.24_467(25) : 時偷盜法相似果。愛別離苦者。是追求時兩舌[相]似果。怨憎會
苦者。

P.24_468(23) : 是追求時惡口相似果。如是等種種諸苦。衆生沒在其中者。

P.24_469(27) : ⁽⁹⁶⁾沈沒苦也。⁽⁹⁷⁾是大聚深廣如海衆生不能得出。故曰。沒在其中。
⁽⁹⁸⁾歡喜下。見

P.24_470(23) : 迷或苦也。歡喜遊戲者。由愛多。不覺不知。不驚不怖者。由癡

P.24_471(25) : 重。亦不生壓者。無智根。不求解脫者。少信力。東西馳走者。

正沈苦

P.24_472(23) : 集。不以爲患。未欣滅道。⁽⁹⁹⁾汝等莫得樂住三界火宅者。⁽¹⁰⁰⁾火宅是

P.25_473(24) : 苦器。汝勿住之。勿貪〔麤弊色聲香味觸也〕〔者〕。五欲是苦具。
汝勿貪之。

P.25_474(25) : 下界故〔人〕。壞不故弊。⁽¹⁰¹⁾智度論曰。衆生常爲五欲所。〔五欲〕
者得之轉劇如

P.25_475(25) : 火炙疥。五欲燒人如逆風執炬。五欲害人〔如〕踐惡毒。如密塗刀
舌舐

P.25_476(25) : 者。傷舌。得之〔時〕少樂失時大苦如此〔著〕麤弊。汝勿貪着。生愛則爲所
燒

P.25_477(25) : 者。是苦力。汝應捨之。⁽¹⁰²⁾汝〔等〕當知。此三乘法皆是聖所稱
讚者。〔數〕。⁽¹⁰³⁾不可呵。

P.25_478(25) : 自在無繫者。或業盡故。無所依求者。心消足。⁽¹⁰⁴⁾若有衆生。
內有智性

P.25_479(28) : 者。是因力。從佛世尊者。是緣力。聞法信受者。思惟力。⁽¹⁰⁵⁾慙勤
精進者。脩行力。

P.25_480(27) : ⁽¹⁰⁵⁾經說。具此四力名丈夫。求一切〔智〕佛智自然智無師智如來
〔知見〕力者無所畏

P.25_481(29) : 者。⁽¹⁰⁶⁾求通達四智通達體。一切智即是佛智。如來力即緣一切
種智。無師智二

P.25_482(27) : 假教。自然智前二自然。聲聞有一切智總相緣故。緣覺有無師智
不假

P.25_483(27) : 教故。菩薩有一切種智行道種故。佛有自然智無切用故。⁽¹⁰⁷⁾劣不兼
勝勝

P.25_484(27) : 必魚劣故佛。其四智也。力無畏通達用是障天魔用天畏是伏外道

用

- P.25_485(25) : 愍念安樂者。求弘濟弘濟以四種憐愍爲體。謂慈悲喜捨。愍念者。
P.25_486(26) : 是悲相^[補]惻苦爲愍記錄爲念。安樂者。是慈^[相]想令行善因爲安令得善
P.25_487(27) : 果爲樂。利益天人者。令入善趣位。度脫一切者。令得三乘果若
人求四
P.25_488(22) : 通達及弘^レ四濟名下佛種。⁽¹⁰⁷⁾譬如長者。有一大宅。其宅久故
P.25_489(28) : 而復頓弊。⁽¹⁰⁸⁾有一大宅者。大宅是衆生本識入如來悲願之中爲
一佛乘所
P.25_490(27) : 攝卽是如來所有。故言長者有一大宅。其宅^[宅]久故。衆^[衆]□□有來無
始故
P.25_491(27) : 曰久。無常敗壞之所{以}言故。而復頓弊者。四者發故頓^レ言。
六識俱惱故
P.26_492(20) : 言弊。瑤梟雕鷲。烏鵲鳩鴿。⁽¹⁰⁹⁾此譬會伏初六鳥譬食
P.26_493(24) : 後二鳥姪貪。⁽¹¹⁰⁾智度論云。饕餐因緣故。受烏鵲瑤梟鷲^[形]之刑。
姪欲
P.26_494(21) : 欲罪重。故爲鳩鴿之屬。蛇^[蛇]蛇^[蛇]蝮^[蝮]。蜈蚣蚰蜒。守宮百足
P.26_495(25) : 狸^[狸]狢^[狸]鼯鼠。諸惡^[蟲]蟲輩。交橫馳走。此譬瞋使。⁽¹¹¹⁾智度云。瞋
恚{多}故受毒⁽¹¹²⁾

四、『妙法蓮華經續述』の撰述年代について

以上、『論義』の「譬喩品」第三以下最後まで翻刻を終える。

以下では、新出史料『續述』と新発見史料『論義』とに対する筆者のこれまでの書誌学的な分析を通じた研究成果をまとめ、『續述』の撰述年代を究明し、『論義』・『問答』の成立についても言及しておきたい。

『續述』の撰述年代について筆者は拙稿「法華章疏における五分釈の展開」において、

『續述』の撰述年代は明確ではないが、序品の釈文に、自らが筆受⁽¹¹³⁾にあたった『大乘莊嚴經論』からの引証⁽¹¹⁴⁾が見られることから、本論の訳了(CE.632)を上限とし、また、慧浄伝に基づけば、貞観十三年(CE.639)の事柄として、『法華経』の「序品第一」の解釈をめぐって道士蔡晃と抗論する際に慧浄が述べたとする説が、『續述』にそのまま見出される⁽¹¹⁵⁾ことからこれを下限と推定しうのみである。或いは道宣(CE.596-667)が『續述』を知っていて後からこれを補ったとしても、『續述』には玄奘(CE.624-664)訳の影響⁽¹¹⁶⁾が見られないから、彼の帰還(CE.645)以前であることは確実である⁽¹¹⁷⁾。

と推定したが、『續述』に対する数少ない先行研究のなかで、この問題について言及している先行研究によれば、

ところで、この『法華経續述』十巻はいつごろ作られたのであろうか。慧浄は唐の貞観十年(六三六)に長安の紀国寺に住して、そこで諸大乘經典の研究講説をおこなって、それぞれの綱要書を書いているから、それは少なくともかれが長安の紀国寺に住した貞観十年以後まもないころに作られたものと考えられる⁽¹¹⁸⁾。

とし、『續述』を慧浄が紀国寺に住した貞観十年(CE.636)以降の撰述と推定している。

慧浄は少なくとも武徳の初歳(CE.618)にはすでに紀国寺に住していたことが知られているが⁽¹¹⁹⁾、ともあれ慧浄伝の「貞観十年に至って、本寺に開講す⁽¹²⁰⁾」という記述を上記の指摘のように、本寺を紀国寺と、開講を諸大乘經典の研究講説と考えれば、確かに貞観十年以降の撰述とみても差し支えない。したがって、筆者の推定した撰述年代の上限632年を636年に修正すれば、『續述』の撰述年代は636年から639年の間ということになる。

ところで、『續述』の抄出である『論義』の成立年代は、『論義』の『續述』に対する抄出態度を窺うために、註に明記した『續述』との対応箇所からも明

らかなように、『論義』は独自の地の文をほとんど有せず、『續述』を簡略化しながらこれを忠実に抄出している。したがって、『論義』の本文からはその成立年代を判ずるような素材はないというに等しい。

一方、『續述』の十巻のうち、巻数にしてわずかに二巻ほど（二割程度）、すなわち、「序品」の末尾から「譬喩品」の半ばまでの抄出である『論義』との対比において、全103問答中、20問答⁽¹²¹⁾（二割程度）が『論義』に見出されることから『續述』の末註であることが明らかとなった『問答』では、経典・論書からの引用文例の場合、『續述』や『論義』に比してより詳細に示される例が多い。つまり、典拠の再確認が行われた形跡がある。

また、『論義』には見当たらないが、『問答』・『續述』に共通・一致する文例が見られることから『問答』は『論義』を介することなく、直接に『續述』を用いていた可能性がある。

しかし、『法華論』の援用文例の場合、『續述』には見当たらないが、『論義』・『問答』に共通する文例が見られる例や、同じ間違いを踏襲する例もあるために、両者は『續述』のほかに『續述』に基づいた敦煌の修治本を同じく受けていた可能性もある。

筆者は『論義』と『問答』とに直接的な影響関係はなかったものと考えているが、この問題については、さらに検討を加えていくことにしたい。

五、今後の課題

本研究により、これまでに散逸したと思われていた『續述』の全容が明らかとなり、また関連史料の『論義』が翻刻公開されたことによって、ようやく『續述』研究の土台ができるようになったのである。

しかしながら、同時代の法華章疏に比して『續述』がそれほど重用されなかった理由とは果たして如何なところにあっただのであろうか。おそらく、新訳の勢いに後押しされてその勢いを一気に背負って台頭してきた慈恩基の『玄

贊』に押されたとも、または慧淨が特定の宗派に属していなかったために、彼の教学、とりわけ法華教学を継承する後学・後継者がいなかったことなどが理由として挙げられようが、ともあれ、慧淨ないし『續述』は、少なくとも敦煌の地においては影響力のあったことが認められる。

すなわち、敦煌文書のなかから『續述』の抄出である『論義』や『續述』の末註である『問答⁽¹²²⁾』が発見されたことから額かれるように、これらの史料こそが敦煌における『續述』研鑽の裏付けの証左になるのである。

ことに、慧淨の著述にして現存するものは、その大半が西域より出土されたものである。この事実を明確にするために、諸史料によって知られる慧淨の著述並びに先行研究によって明らかになった西域出土文献における慧淨の著述(類同・類似を含む)をまとめてみると以下ようになる⁽¹²³⁾。

- ① 失 慧淨述『雜心玄文』三十卷〔『續高僧傳』・『新唐書』〕
- ② 失 慧淨述『俱舍論文疏』三十余卷〔『續高僧傳』・『新唐書』〕
- ③ 失 慧淨撰『注金剛般若經』一卷〔『續高僧傳』・『法苑珠林』〕
- ④ 存 慧淨註『金剛般若波羅蜜經註』三卷 (S.24 no.456)

類同：〔S.2050〕・T.85 no.2738⁽¹²⁴⁾

- ⑤ 失 慧淨撰『諸經講序』一卷〔『大唐內典錄』・『法苑珠林』〕
- ⑥ 失 慧淨 『大莊嚴論文疏』三十卷〔『續高僧傳』・『新唐書』〕
- ⑦ 失 慧淨述『大莊嚴論疏』十卷〔『法相宗章疏』〕
- ⑧ 存 慧淨撰『析疑論』一部一卷 (T.52 no.2103所収)
- ⑨ 失 慧淨撰『詩英華』一帙十卷〔『續高僧傳』〕
- ⑩ 存 慧淨述『妙法蓮華經續述』十卷 (Kor.206・Kor.1468)

抄出：〔S.6494〕(前稿・本稿)

末註：〔S.2662〕・T.85 no.2752)

- ⑪ 失 慧淨 『法華經贊略』二卷〔『東域傳燈目錄』〕

- ⑫ 失 慧浄 『勝鬘經疏』〔『續高僧傳』〕
⑬ 失 慧浄述『仁王般若疏』二卷〔『法相宗章疏』〕
⑭ 存 惠浄撰『溫室經疏』一卷〔S. 2497〕・T.85 no.2780〕

類同：〔S.3047〕・〔S.3881〕・〔上図068 (812510)〕

- ⑮ 存 慧浄撰『〔孟蘭〕盆經讀述』一卷〔P.2269〕・T.85 no.2781〕

類似：〔上図068 (812510)〕・〔出口 三二五 (PL. LVI A9)〕

- ⑯ 失 慧浄 『彌勒上生經疏』〔『續高僧傳』〕
⑰ 失 慧浄 『彌勒下生經疏』〔『續高僧傳』〕
⑱ 失 慧浄述『彌勒成佛經疏』一卷〔『法相宗章疏』〕
⑲ 存 慧浄述『阿彌陀經義述』一卷 (T.37 no.1756)
⑳ 存 慧浄作『般若波羅蜜多心經疏』一卷 (SZ.26 no.521)

類同：〔S.554〕・〔S.5850〕・〔北図 崑12〕

類似：i 〔S.839〕・〔S.7821〕・〔P.2178〕・〔P.3229〕・〔P.4940〕・

〔北図 為52〕・〔北図 闕9〕、ii 〔龍大 五三一〕

- ㉑ 存 慧浄か『無量壽觀經義記⁽¹²⁵⁾』一卷〔〔S.327〕・T.85 no.2760〕

類似：〔S.524〕

- ㉒ 失 慧浄か『顯揚論疏』〔『東域傳燈目錄』〕

こうしてみると、一般的にテキストの混乱が指摘されている西域出土文献が慧浄の現存する著述の大半を占めている現状のなかで、韓国に刊本として現存している『續述』の史料価値が如何に高いか言うまでもなからう。したがって、『續述』こそ史料として最も確実で、かつ質量ともに群を抜いているといえることができるのである。

というのは、従来、慧浄伝に基づいて645年と推定されていた慧浄の没年を、近年、西域より出土された慧浄関連の史料とも整合性を持たせるために、それ以降に修正・見直そうとする傾向にあるが、先述したように、他の史料はとも

かく、史料として最も確実な『續述』には、新訳の影響がまったく見られず、645年以前の撰述であることは確定的であるため、没年再検討の史料として『續述』は不適切であることを指摘しておきたい。

また、これまでは慈恩基の著述のなかで、『大般若波羅蜜多經般若理趣分述讚』(T.33 no.1695 p.27b)と『玄贊』(T.34 no.1723 p.661b)とに、慧浄の名を出してその説を紹介している各一例ずつを知るに過ぎなかったが、『續述』の現存することが明らかになった以上、これまでは掘り下げることのできなかった、慈恩基が慧浄よりどの程度影響を受けているのか、または『玄贊』自体に『續述』がどの程度影響を及ぼしているのかといった問題に対する検証が可能となったため、これを明らかにすることが今後の研究課題の一つになると考えられる。

さらに『續述』において、世親の『法華論』の解釈をふんだんに取り入れている慧浄は、同じく世親釈⁽¹²⁶⁾の『大乘莊嚴經論』の筆受にあたり、文疏三十巻を著しているほど、世親の唯識理解に対する見識の深さも期待できるため、『續述』には、世親の『法華論』に対する新たな見解や解釈が見出される可能性がある。

さて、『續述』の後代への影響については、法華章疏に限るものではあるが、すでに拙稿「法華章疏における五分釈の展開」において論じたために、本稿では詳述しないが、二三付け加えておけば、慧浄が『法華論』をもとに創案した「五分釈」が『續述』以降の法華章疏に広く採用されるようになったのは、直接的に『續述』による影響とは言い難く、正しくは慈恩基の『玄贊』を媒介として広まったと見た方が無難かも知れない。

なお、道世(CE.-668-)の『法苑珠林』が慧浄の『續述』を大幅に引用し、これに依拠している例⁽¹²⁷⁾が確認できたため、指摘しておきたい。

その他、これまでも確実に『續述』からの引用・援用が認められる法華章疏については、『論義』と対応関係にある文例は、前・本稿における該当箇所の

註に、また、『論義』とは対応しなくとも、『續述』に対応する文例、例えば、義一(CE.VII-VIII)の『法華經論述記』の三例⁽¹²⁸⁾などは註に明記し明らかにしてきたとおりであるが、これまでの調査により、新たに作者未詳の『法華經玄贊釋』に二例⁽¹²⁹⁾、中算(CE.X)の『妙法蓮華經釋文』に八例⁽¹³⁰⁾が確認できたため、その対応箇所を示しておく。

最後に、『續述』の場合、筆者がこれまで収集した百点ばかりの西域出土漢文文献法華章疏と対照をしていけば、「化城喻品」以下、さらにはその関連史料が見つかる可能性がある。

スタイン(Stein Márk Aurél, CE.1862-1943)は、敦煌の地で大量の写本をみてそれを「聖なる廃棄物(sacred waste)」と名付けたという⁽¹³¹⁾。筆者はフランス国立図書館でその「聖なる廃棄物」の一部に触れ⁽¹³²⁾、自分のスキルを活かし、コンピタンスを最大限に発揮できる研究領域と出合った。おかげで現在筆者はゴミあさりに夢中である。

(2011年7月稿)

〈註〉

- (1) 本稿の校正中に、巻五・六の画像データとテキストデータとが「国家記録遺産ホームページ」に公開されていることを知った。ただこれは原文とおりの翻刻であるため、異体字、旧字体の確認は本稿の付録「異体字・旧字体一覧」を、欠損・破損箇所の補填は本稿の註を参照されたい。
- (2) とくに『要集』は、從義(CE.1042-1091)撰『天台三大部補注』巻第五に「經云諸修行 慈恩云行字去聲今謂準義雖然應須平聲。記云他人於此離爲三門 大唐之時嘉祥紀國安國慈恩等並有法華疏故有此說今既不傳難爲尋索下文多有指他之言準斯可識若與慈恩而辨得失臨文一一引示。」(SZ.28 no.586 p.229b, ll.5-10)とあるように、早くも十一世紀半ばには散逸してしまった安国寺利涉(CE.-625-722-)の『法華疏』についても多数の引用が見られるため、利涉の『法華疏』研究に際しての貴重な史料になる。なお、『要集』自体は、貞慶(CE.1155-1213)撰(CE.1208)『法華開示抄』(T.56 no.2195)に「鏡水抄」として頻繁に引用される。
- (3) 慧浄(CE.578-645?)述『妙法蓮華經續述』巻第五に「妙法蓮華經續述巻第五

唐京師紀国寺沙門釋 慧淨 述 譬喻品第三 自下十八品開宗。廣明一乘。論主括節大申兩意。一括十對治。廣破一乘障。二括十無上。廣立一乘道。廣破一乘障。是申前破二義。廣立一乘道。是申前明一義。大障破大道立。大解成大行起。如此即大理定大教弘大記圓大事顯。故曰。唯以一大事因緣故出現於世。十對治者。謂七譬三平等。七譬者。一火宅。二窮子。三藥草。四化城。五繫珠。六解珠。七醫師。三平等者。一乘平等。二世間涅槃平等。三身平等。」(Kor.1468 p.3-1r, 11.1-10) とある。

- (4) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「論說七譬。破七種有煩惱人。七種增上慢。一求勢力人。倒求增上慢。二求聲聞人。一向增上慢。三求大乘人。一向增上慢。四有定人。實無而有增上慢。五無定人。散亂增上慢。六集功德人。取非增上慢。七不集功德人。不取一乘增上慢」(Kor.1468 p.3-1r, 11.11-15) とある。引用文中、「論說七譬」とは、婆藪槃豆釈菩提留支曇林等訳 (CE.528) 『妙法蓮華經憂波提舍』卷下の「何者七種具足煩惱染性衆生。一者求勢力人。二者求聲聞解脫人。三者大乘人。四者有定人。五者無定人。六者集功德人。七者不集功德人。何等七種增上慢心。云何七種譬喻對治。一者顛倒求諸功德增上慢心。謂世間中諸煩惱染熾然增上。而求天人勝妙境界有漏果報。對治此故爲說火宅譬喻應知。二者聲聞一向決定增上慢心。自言我乘與如來乘等無差別。如是倒取。對治此故爲說窮子譬喻應知。三者大乘一向決定增上慢心。起如是我無別聲聞辟支佛乘。如是倒取。對治此故爲說雲雨譬喻應知。四者實無謂有增上慢心。以有世間三昧三摩跋提。實無涅槃生涅槃想。如是倒取。對治此故爲說化城譬喻應知。五者散亂增上慢心。實無有定。過去雖有大乘善根而不覺知。不覺知故不求大乘。狹劣心中生虛妄解。謂第一乘。如是倒取。對治此故爲說繫寶珠譬喻應知。六者實有功德增上慢心。聞大乘法取非大乘。如是倒取。對治此故爲說輪王解自髻中明珠與之譬喻應知。七者實無功德增上慢心。於第一乘不曾修集諸善根本聞第一乘心中不取以爲第一。如是倒取。對治此故爲說醫師譬喻應知。第一人者。示世間中種種善根三昧功德方便令喜。然後令入涅槃故。第二人者。以三爲一令入大乘故。第三人者。令知種種乘諸佛如來平等說法。隨諸衆生善根種子而生芽故。第四人者。方便令入涅槃城故。涅槃城者。所謂諸禪三昧城故。過彼城已。然後令入涅槃城故。第五人者。示其過去所有善根。令憶念已。然後教令入三昧故。第六人者。說大乘法。以此法門同十地行滿。諸佛如來密與授記故。第七人者。根未淳熟爲令熟故。如是示現得涅槃量。爲是義故。如來說七種譬喻。」【T.26 p.8 脚註④】「集=習(習)」【T.26 p.8 脚註⑤】「彼=後(後)」【T.26 p.8 脚註⑥】「密=蜜(蜜)」【T.26 p.8 脚註⑦】「說+(此)(此)」(T.26 no.1519 p.8b, 1.1 - p.8c, 1.10) に対応する。ただし、『續述』・『論義』・『問答』では『法華論』の七種譬喻中、三、雲雨譬喻の名を藥草譬[喻]に改める。また、『法華問答』に「(15/3-1) 譬喻品二十二條 問。論說十種對治及十種無上名

顯何義。并列其名 答。十種對治顯破三義。十種無上顯明一義。十種對治者。七喻三平等。七譬者。一火宅譬。二窮子譬。三藥草譬。四化城譬。五繫珠譬。七醫師譬。三平等者。一乘平等。二世間涅槃平等。三身平等。七譬對治有煩惱人病。三平等對治無煩惱人顛倒信。用此十對治破二十障。十無上者。一種子無上雲雨示現。二修行無上大通智勝如來示現。三增上無上商譬示現。四解無上繫譬珠示現。五淨土無上寶塔品示現。六說無上解珠譬示現。七教化力無上踊出品示現。八菩提無上壽量品示現。九涅槃無上醫師譬示現。十勝妙力無上餘殘修多羅示現。用此十種顯菩薩道」(T.85 no.2752 p.199c, l.17 - p.200a, l.2) とほぼ一致する文例が見られる。ただし、『問答』の本箇所では『法華論』・『續述』・『論義』の七[種]譬[喻]中、六、解珠[譬喻]の名を欠く。また、『法華論』・『續述』・『問答』では十無上中、三、增長力無上(『問答』では増上無上)を商[主]譬[喻・示現]とするのに対し、『論義』のみは化城示現と名を異にする。

- (5) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「第一求勢力人者。即欲界凡夫人天勝境界實僿弊非樂爲樂。故名倒求。火宅譬中。先令戲三。拔其□□□□入一與其大樂故爲對治。」(Kor.1468 p.3-1r, l.15 - p.4-1v, l.2) とある。また、『法華問答』に「(88) 問。譬喻品中明何義 答。品内明初據舍利弗記。後明火宅譬對治求勢力人倒求增上慢。此是欲界凡夫無勝境界實僿弊非樂計樂故名倒求。火宅譬中光明三車。拔其大苦緣合入理與其大乘。論云。以世間諸煩惱熾然。人天以爲妙境。對治此相說火宅譬」(T.85 no.2752 p.203c, l.24 - p.204a, l.1) とほぼ一致する文例が見られる。
- (6) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「第二求聲聞人者。即聲聞種性人。如來方便於一開三。自謂下乘上與佛等故名一向倒。窮子譬中。初蒙少價不悟貧苦。後獲大寶方知今富。故爲對治。」(Kor.1468 p.4-1v, ll.2-5) とある。また、『法華問答』に「(49) 問。信解品中明何義 答。信解品中明窮子譬。對聲聞人一向倒。此即是聲聞種姓人。如來方便於獲大寶。故論云。聲聞人一向增上慢我乘與如來乘等無差別。對此顛倒故說窮子喻」(T.85 no.2752 p.201c, ll.20-25) とほぼ一致する文例が見られる。
- (7) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「第三求大乘人者。即菩薩種性人。教雖一味等被三根捨立權三而偏執一故亦名一向倒。藥草譬中。一味之雨三草同潤令知根別破其一迷。故爲對治。」(Kor.1468 p.4-1v, ll.5-7) とある。また、『法華問答』に「(51) 問。藥草喻品明何義 答。藥草喻品中對治求大乘人一向到此。是菩薩種性人。教雖一味等被三。藥草喻中明一味之雨。三草用潤合知根外破其迷一故。論云。大乘人一向增上慢無別。聲聞辟支佛乘對治此顛倒故說藥草喻」(T.85 no.2752 p.202a, ll.2-7) とほぼ一致する文例が見られる。
- (8) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「第四有定人者。即得定凡夫有漏世定實非涅槃。於中妄執生涅槃想故名實無而有。化城譬中。立化滅化令入令出。指近指遠破昔破今。故爲對治。」(Kor.1468 p.4-1v, ll.7-10) とある。また、『法華問答』に「(56) 問。

化城喻中明何義 答。明對治有定之實無而有增上慢。即凡夫有漏定實非涅槃。於中妄起生涅槃相故名爲倒。以權立化城進近令違故。論云。實無有增上慢人。以有世間三摩拔提實無涅槃生涅槃相。對治此故說化城喻」(T.85 no.2752 p.202b, 11.7-12) とほぼ一致する文例が見られる。また、審乗(CE.1258-1313-)撰『華嚴五教章問答抄』下九に「又惠淨法華疏云。凡夫謂有漏定爲涅槃。二乘執無漏定以爲涅槃」(T.72 no.2340 p.754c, 11.11-13) と類似する文例が見られる。

- (9) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「第五無定人者。即退菩薩性人。習道不進忘昔大善修空耶僻。故名散亂。繫珠譬中。示其衣珠令其記憶。教入三昧令憶昔善。故爲對治。」(Kor.1468 p.4-1v, 11.10-12) とある。また、『法華問答』に「(53) 問。五百弟子授記品中明何義 答。對治無定人。散亂心即是菩薩種性人習道不進。要昔大善修空邪僻故名散亂。繫珠譬中。示衣珠令其記憶。故論云。散亂心人實無有定。過去有大乘善根而不覺知。被不求大乘。於狹劣心中生虛妄解。以爲第一乘。於治此故說寶珠譬。妙亦是合解無上故。論云亦現令解無上。故說繫珠譬」(T.85 no.2752 p.202a, 11.19-26) とほぼ一致する文例が見られる。
- (10) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「第六有功德人者。即有學聲聞人。斷少煩惱故有功德。大乘應取反取小乘。故名取非。解珠譬中。前賜田宅後與明珠。前賜小果後與大樂。故爲對治。」(Kor.1468 p.4-1v, 11.12-15) とある。また、『法華問答』に「(66) 問。云何名有功德人 答。是有學聲聞人。斷少煩惱故有功德。解珠譬中。前賜由宅明與小果。後賜明珠與大眾故爲對治論云。有功德人說大乘。而非大乘對治。此說王解譬中明珠與之譬喻亦名說無上」(T.85 no.2752 p.202c, 1.28 - p.203a, 1.3) とほぼ一致する文例が見られる。
- (11) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「第七無功德人者。即三乘種性人。佛說一乘不肯修習。猶醫留妙藥子不服之。然即醫設權方癡子方服妙藥。佛現滅度鈍性方修一乘。故爲對治。」(Kor.1468 p.4-1v, 1.15 - p.5-2r, 1.2) とある。また、『法華問答』に「(68) 問云何對治不舉功德人 答。即三乘種性人。佛說一乘不肯受持修習故。醫師譬中。明醫師設增權身癡子始服妙藥佛現滅度鈍性萬修一乘故。論云。無功德人於第一乘不舉功德。說第一乘不取對治。此故說醫師譬喻。應知復是涅槃無上。故論云。不現涅槃無上故說醫師譬」(T.85 no.2752 p.203a, 11.6-12) とほぼ一致する文例が見られる。
- (12) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「論說三平等。破無煩惱人三種顛倒信。一信種種乘異。二信世間涅槃異。三信彼此身異。爲破信乘異。故說乘平等。與聲聞授記。唯有大乘無有二乘。爲破世間涅槃異。故說世間涅槃平等。以多寶入涅槃世間涅槃平等故。爲破身異。故說身平等。多寶入涅槃已復示現。自身他身法身平等故。案約二乘。說乘平等。顯一切諸佛同意。約世間。說涅槃平等。顯一切諸佛同體。約自身他身。說身平等。顯一切諸佛同業。由同意故與聲聞授記。由同體故一切世間本

來自性解脫。故多寶息化入於涅槃。由同業故多寶入已復出。顯諸佛同化同證授記。同意顯應身。同體顯法身。同業顯化身。」(Kor.1468 p.5-2r, 11.2-12) とある。引用文中、「論說三平等」とは、『妙法蓮華經憂波提舍』卷下の「何者三種無煩惱人三種染慢。所謂三種顛倒信故。何等爲三。一者信種種異。二者信世間涅槃異。三者信彼此身異。爲對治此三種染慢故。說三種平等應知。何者名爲三種平等。云何對治。一者乘平等。謂與聲聞授菩提記。唯一大乘無二乘故。是乘平等無差別故。二者世間涅槃平等。以多寶如來入於涅槃。世間涅槃彼此平等無差別故。三者身平等。多寶如來已入涅槃。復示現[●]身自身他身法身平等無差別故。如是三種無煩惱人染慢之心見彼此身所作差別。不知彼此佛性法身悉平等故。謂即此人我證此法故。彼人不得此對治故。與諸聲聞授記應知。」【T.26 p.8 脚註③】「[身]—㊦」(T.26 no.1519 p.8c, 11.10-24) に対応する。

- (13) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「論曰十無上者。一種子無上。二修行無上。三增長力無上。四令解無上。五淨土無上。六說無上。七教化力無上。八菩提無上。九涅槃無上。十勝妙力無上。一種子無上。雲雨譬示現。二修行無上。大通智勝如來示現。三增長力無上。商主譬示現。四令解無上。繫珠譬示現。五淨土無上。寶塔示現。六說無上。解珠譬示現。七教化力無上。踊出菩薩示現。八菩提無上。壽量示現。九涅槃無上。醫師譬示現。十勝妙力無上。餘殘修多羅示現。」(Kor.1468 p.5-2r, 1.12 - p.6-2v, 1.5) とある。引用文中、「論曰十無上」とは、『妙法蓮華經憂波提舍』卷下の「如來說言不離我身是無上義。一切聲聞辟支佛等二乘法中不說此義。以其不能如實解故。以是義故。諸菩薩等行菩薩行非爲虛妄。無上義者。自餘經文明無上義。無上義者。略有十種此義應知。何等爲十。一者示現種子無上故說雨譬喻。汝等所行是菩薩道者。謂發菩提心退已還發者。前所修行善根不滅同後得果故。二者示現行無上故說大通智勝如來本事等。三者示現增長力無上故說商主譬喻。四者示現令解無上故說繫寶珠譬喻。五者示現清淨國土無上故示現多寶如來塔。六者示現說無上故說解譬中明珠譬喻。七者示現教化衆生無上故地中[●]踊出無量菩薩摩訶薩等。八者示現成大菩提無上故。示現三種佛菩提故。一者示現[●]應佛菩提。隨所應見而爲示現。如經皆謂如來出釋氏宮去伽耶城不遠坐於道場得成阿耨多羅三藐三菩提故。二者示現報佛菩提。十地行滿足得常涅槃證故。如經善男子我實成佛已來無量無邊百千萬億那由他劫故。三者示現法佛菩提。謂如來藏性淨涅槃常恒清涼不變等義。如經如來如實知見三界之相次第乃至不如三界見於三界故。三界相者。謂衆生界即涅槃界。不離衆生界有如來藏故。無有生死若退若出者。謂常恒清涼不變義故。亦無在世及滅度者。謂如來藏眞如之體。不即衆生界。不離衆生界故。非實非虛非如非異者。謂離四種相。有四種相者。是無常故。不如三界見於三界者。謂佛如來能見能證眞如法身。凡夫不見故。是故經言如來明見無有錯謬故。我本行菩薩道今猶未滿者。以本願故。衆生界未盡願非究竟故。言未滿非謂菩提不滿足也。

所成壽命復倍上數者。此文示現如來[●]命常善巧方便顯多數故。過上數量不可數知。我淨土不毀而衆見燒盡者。報佛如來眞實淨土。第一義諦之所攝故。九者示現涅槃無上故說醫師譬喻。十者示現勝妙力無上故。自餘經文示現應知。」【T.26 p.9 脚註⑦】「踊＝涌[㊦]」【T.26 p.9 脚註⑧】「應＝(化)[㊦]」【T.26 p.9 脚註⑨】「命常＝常命[㊦]，＝常念[㊦]」(T.26 no.1519 p.9a, l.25 - p.9c, l.6) に対応する。また、『法華問答』には「(65) 問 見寶塔品中明何義 答。明清淨國土無上。故論云。示現清淨國土無上故。示現多寶如來塔」(T.85 no.2752 p.202c, ll.25-27)・「(67) 問。從地踊出品中明何義 答。明教化衆衆無上故。論云。示現教化衆生無上故。說無量菩薩從地踊出」(T.85 no.2752 p.203a, ll.3-6) とある。

- (14) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「案時雨既降。即草木滋萌法水亦流。即道芽便發故。以雲雨譬示現。種子無上。然彼之與我雖下種一時。而津途致果。即道成懸隔所以。須申已行以厲彼心故。次大通如來示現。修行無上。我既有能須令彼進所以。立化滅化進近進遠故。次化城示現。增長力無上。彼既可進須反其迷所以。示其衣珠教入三昧故。次繫珠示現。令解無上。彼既得解其心稍淨。隨其心淨即佛土淨故。次現塔示現。淨土無上。既入淨土即堪聞大法故。次解珠示現。說無上。佛有堪能受者。必益故。次踊出示現。教化力無上。物謂如來成佛甫述何得。門徒道亞玄極。若不遠申靈算無以祛彼情疑故。次壽量示現。菩提無上。或聞佛壽靈長便生怠慢所以。權須唱滅以告難逢故。次醫師示現。涅槃無上。九事得成並由經力具須讚述令物鑽仰故總。餘殘修多羅示現。勝妙力無上。」(Kor.1468 p.6-2v, l.5 - p.7-3r, l.3) とある。
- (15) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「餘殘二義。一上殘。二下殘。上殘。謂十治九無上。所不攝處。即法師品。勸持品。安樂行品。廣說法勝妙力。下殘。即分別品。隨喜品。法師功德品。不輕菩薩品。廣說法勝妙力。」(Kor.1468 p.7-3r, ll.3-6) とある。また、栖復集 (CE.879) 『法華經玄贊要集』卷第三十一には「言科判四品者。意道紀國科正宗中四品。與慈恩流通中科。道理不別也。言論中有七喻三平等。是正文。十無上是殘文。前九上名上殘。上殘中有文殘。若第十無上。即是前九無上之殘。其第十無上名下殘。下殘中亦有文殘義殘。然第十無上中有法力。攝諸品盡。總名下殘。故說法師品。是持力所攝。其法師品即下殘中文殘攝。」(SZ.34 no.638 p.839a, ll.12-18) とある。
- (16) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「文開二節。初十四品廣顯經宗。後四品廣明經用。顯宗者。爲轉其執。廣申破二明一。顯法授人。明用者。爲令其仰。廣說生福長道。能多能速。大槩如此細亦相兼但互相成耳。顯宗復爲二節。初七品約解授記。後七品約行授記。解是於理了悟。行是於教修習。約解是破聲聞執。約行是教菩薩道。約解是授聲聞記。約行是授菩薩記。約解多是別記。約行多是通記。約解自有二周。初四品授上根人記。後三品授中根人記。下根人者。餘處與記。此會不得記。上根

者。多是應化聲聞故。前與記。中根者。多是退已發心聲聞故。後與記。下根者。多是決定性聲聞故。餘處與記。如化城品云。我於餘國。更有異名。是人雖生滅度之想入於涅槃。而於彼土求佛智慧。得聞是經。唯以佛乘而得滅度也。上根四品。即爲四節。譬喻品開解。信解品領解。藥草品述解。授記品授解。譬喻開解者。譬是類名。喻是曉義。以其所悟。曉其所迷。故稱譬喻。然此經一部大有七譬。而此品獨受通名者。自有二意。一爲在初。二由佛說。餘譬互關。故相避受名。此品兩節。一身子領解。二餘人未解。身子領解。仍開別記之端。餘人未解。即生通記之譬。初即譬緣起。後即正譬義。領解三重。一身子領解。二如來授解。三人天供解。領解先序說。後頌說。序說兩重。一現相。二述心。」(Kor.1468 p.7-3r, l.6 - p.8-3v, l.10) とある。引用文中、「化城品云」とは、鳩摩羅什訳 (CE.406)『妙法蓮華經』「化城喻品」の「我滅度後。復有弟子不聞是經。不知不覺菩薩所行。自於所得功德生滅度想。當入涅槃。我於餘國作佛。更有異名。是人雖生滅度之想入於涅槃。而於彼土求佛智慧。得聞是經。唯以佛乘而得滅度。更無餘乘。除諸如來方便說法。」(T.9 no.262 p.25c, ll.14-20) に対応する。

- (17) 本箇所は、『妙法蓮華經受波提舍』巻下の「言聲聞人得授記者。聲聞有四種。一者決定聲聞。二者増上慢聲聞。三者退菩提心聲聞。四者應化聲聞。二種聲聞如來授記。謂應化者。退已還發菩提心者。若決定者増上慢者二種聲聞。根未熟故不與授記。菩薩與授記者。方便令發菩提心故。」【T.26 p.9 脚註⑤】「故+(如來)㊦㊧」【T.26 p.9 脚註⑥】「記+(應化聲聞是大)㊦㊧」(T.26 no.1519 p.9a, ll.16-20) に対応する。ただし、『續述』・『論義』の本箇所では『法華論』の増上慢聲聞に関する記述は見当たらない。
- (18) 『妙法蓮華經』「譬喻品」に「爾時舍利弗踊躍歡喜。即起合掌瞻仰尊顏。而白佛言。今從世尊聞此法音。心懷勇躍得未曾有。所以者何。我昔從佛聞如是法。見諸菩薩授記作佛。而我等不豫斯事。甚自感傷。失於如來無量知見。世尊。我常獨處山林樹下。若坐若行。每作是念。我等同入法性。云何如來以小乘法而見濟度。是我等咎非世尊也。所以者何。若我等待說所因成就阿耨多羅三藐三菩提者。必以大乘而得度脫。然我等不解方便隨宜所說。初聞佛法遇便信受思惟取證。世尊。我從昔來終日竟夜每自剋責。而今從佛聞所未聞未曾有法。斷諸疑悔。身意泰然快得安隱。今日乃知真是佛子。從佛口生從法化生。得佛法分。」【T.9 p.10 脚註⑥】「勇=踊㊦㊧」【T.9 p.10 脚註⑦】「授=受㊦㊧(敦乙)」【T.9 p.10 脚註⑧】「豫=預㊦㊧」【T.9 p.10 脚註⑨】「常=常㊦㊧」【T.9 p.10 脚註⑩】「是=然㊦㊧」(T.9 no.262 p.10b, l.29 - p.10c, l.14) とある。
- (19) 『妙法蓮華經續述』巻第五に「避席者。執恭所以起而合掌。目擊者。存道所以瞻乎佛面。」(Kor.1468 p.8-3v, ll.14-15) とある。
- (20) 『妙法蓮華經續述』巻第五に「而白佛言者。心雖悅而身旦恭。口未宣而解尚隱。

故更啓尊以自述自述之辭。即是聞此法音。得未曾有也。」(Kor.1468 p.9-4r, Ⅱ.6-8)とある。

- (21) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「我昔從佛聞如是法者。領開一乘法。見諸菩薩受記作佛者。領開一乘人。」(Kor.1468 p.9-4r, Ⅱ.8-10)とある。
- (22) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。而我等不預至無量知見者。此領述開。彼獲大寶。而我獨懸隔。既喪明復失果。故感激而自傷。」(Kor.1468 p.9-4r, Ⅱ.10-11)とある。
- (23) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「山林行坐者。領入方便。山林幽寂可以來思行坐沈吟自多動慮故宴坐經行之處持爲發疑之所。」(Kor.1468 p.9-4r, Ⅱ.13-15)とある。
- (24) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「身子初逢馬宿聞三諦。而獲初果。次因長瓜悟一言。而階上聖。自是而後歷聞方等。屢踐空門雖未顯授。於法財抑亦同入法性矣。」(Kor.1468 p.10-4v, Ⅱ.3-5)とある。また、慧浄撰『●[孟蘭]盆經讀述』に「經曰其德汪洋者 述曰。道隨戒也。汪洋者。盛貌之威儀也。然行則衷王觀親取嚴形以降魔 坐若就盤見不動而憚法故。門外親沙門之像深嗟五欲之怨。城中逢馬宿之客。聞之帝而獲初果。斯則威儀之益也。」【T.85 p.540 脚註①】「^⑧佛蘭西國民圖書館藏燉煌本, P. 2269, 首題新加」(T.85 no.2781 p.542c, l.28 - p.543a, l.3)と類似する文例が見られる。
- (25) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「身子志狹事小入同得異酌海既不測其淺深。而謂尊授有優劣不省已過咎佛賜偏也。」(Kor.1468 p.10-4v, Ⅱ.6-8)とある。
- (26) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「向不自審妄咎於佛。三思覆察失在於我。故非世尊也。」(Kor.1468 p.10-4v, Ⅱ.9-10)とある。
- (27) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「待說所因者。待謂停待。因謂三因。一應得因。二加行因。三圓滿因。」(Kor.1468 p.10-4v, Ⅱ.10-11)とある。
- (28) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「若我待說大因。不證小果。非但同入實亦同得。故咎非世尊也。」(Kor.1468 p.12-5v, Ⅱ.6-7)とある。
- (29) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。然我等至思惟取證者。此結迷謬也。不解方便隨宜所說者。此結迷於權教。初聞佛法遇便信受者。此結迷於權行。思惟取證者。此結迷於權果。由迷三法不待三因。入同得異咎自是我。故非世尊。」(Kor.1468 p.12-5v, Ⅱ.7-11)とある。
- (30) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。我從昔來至每自剋責者。次領悟義三重。一舉昔迷。二明今悟。三明利益。此舉昔迷。日終夜竟。剋已責心。累日連宵。憂多迷重也。」(Kor.1468 p.12-5v, Ⅱ.11-13)とある。
- (31) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。而今從佛至斷諸疑悔者。此明今悟。既稟一道理祛百滯。故曰。聞所未聞斷諸疑悔。」(Kor.1468 p.12-5v, Ⅱ.13-15)とある。
- (32) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。身意泰然快得安隱者。此明利益。泰通也。

- 快樂也。憂悔塞心所以不泰疑搖其慮是故不安。今既悔蕩疑除所以身通意樂。」(Kor.1468 p.12-5v, l.15 - p.13-6r, l.2) とある。また、吉藏 (CE.549-623) 撰『法華義疏』卷五に「身意[●]泰然快得安穩者[●]憂悔塞心所以不泰疑搖其慮故不安穩也。」【T.34 p.513 脚註④】「泰=太(聖乙)」【T.34 p.513 脚註④】「憂悔……安穩也」十七字-(聖乙)」(T.34 no.1721 p.513c, ll.11-13) と一致する文例が見られる。
- (33) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。今日乃知至得佛法分者。此領入義四句四意。一眞是佛子者。受父體分信心種子從眞流故。二從佛口生者。受父教訓得聞慧故。三從法化生者。生在父含入思慧故。四得佛法分者。受父付屬行修慧故。」(Kor.1468 p.13-6r, ll.2-5) とある。
- (34) 『妙法蓮華經』「譬喻品」に「我本著邪見 爲諸梵志師 世尊知我心 拔邪說涅槃」(T.9 no.262 p.11a, ll.10-11) とある。
- (35) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「偈云。我本著邪見者。受邪教爲外道弟子時。爲諸梵志師者。轉邪道爲外道師主時。世尊知我心者。邪機動善根成熟時。拔邪說涅槃者。邪病[●]破[●]解脫生死時。此明身子初爲刪闍邪弟子。其師沒後統彼徒衆。佛誡馬宿汝見非常之人。勿廣說法馬宿後逢身子。略說三諦。彼獲初果。即此偈義。」(Kor.1468 p.15-7r, l.12 - p.16-7v, l.2) とある。
- (36) 『妙法蓮華經』「譬喻品」に「初聞佛所說 心中大驚疑 將非魔作佛 惱亂我心耶」(T.9 no.262 p.11a, ll.20-21) とある。
- (37) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「此偈身子。創稟明一之宗。撤破二之說。謂魔化形以惑目。變說以亂心。」(Kor.1468 p.16-7v, ll.7-9) とある。
- (38) 『妙法蓮華經』「譬喻品」に「然舍利弗。今當復以譬喻更明此義。諸有智者以譬喻得解。」(T.9 no.262 p.12b, ll.12-13) とある。
- (39) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「智者即四大聲聞等。彼雖未能忘言以悟旨。或可虛心以待譬。將欲爲其說譬義。先以智者擊讚之。」(Kor.1468 p.28-13v, ll.3-4) とある。
- (40) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。舍利弗至及諸僮僕者。此下正譬。此譬破求勢力人。倒求增上慢衆生有三行。一罪行。謂不善業。二福行。謂散善業。三不動行。謂定善業。」(Kor.1468 p.28-13v, ll.5-7) とある。
- (41) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「而設兩譬。一火宅。二三車。火宅即惑病。三車即救病。」(Kor.1468 p.28-13v, ll.9-10) とある。
- (42) 『妙法蓮華經』「譬喻品」に「舍利弗。若國邑聚落有大長者。其年[●]衰邁財富無量。多有田宅及諸僮僕。其家廣大。唯有一門。多諸人衆。一百二百乃至五百人。止住其中。堂閣朽故牆壁[●]墮落。柱根腐敗梁棟傾危。[●]周匝俱時欻然火起焚燒舍宅。長者諸子。若二十或至三十。在此宅中。長者見是大[●]火從四面起。即大驚怖。而作是念。我雖能於此所燒之門安隱得出。而諸子等。於火宅內樂著嬉戲。不覺不知

不驚不怖。火來逼身苦痛切己。心不厭患無求出意。」【T.9 p.12 脚註①】「衰邁財富=衰返財遇^②」【T.9 p.12 脚註②】「隕=頽^③」【T.9 p.12 脚註③】「周=週^④」【T.9 p.12 脚註④】「火=大宮^⑤」(T.9 no.262 p.12b, 11.13-23) とある。

- (43) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「別而言之。自有四義。一有名。二有位。三有年。四有財。國邑聚落■此顯有名國爲大處。邑爲中處。聚落爲小處。長者之名■于三處。故是有名。長者三處。即譬如來三田。一說法田。以三千世界爲境界。此爲小處。二神通田。以十倍說法田爲境界。此爲中處。三智慧田。以一切世界爲境界。此爲大處。說法田化聲聞。神通田化緣覺。智慧田化菩薩。」(Kor.1468 p.28-13v, 11.14 - p.29-14r, 1.5) とある。また、『法華問答』に「(16/3-2) 問。國邑聚落有大長者。國邑聚落譬何法。有大長者譬何人 答。國邑聚落譬如□境。有大長者譬如來身。國爲大處譬如來智慧境。以一切世界爲境故。邑爲中處譬如來神通境。以十億三千界爲境故。聚落爲小處譬如來說法境。以三千大千世界爲境」(T.85 no.2752 p.200a, 11.2-8) とほぼ一致する文例が見られる。
- (44) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「其年衰邁者。此顯有年。有位即師之輩。有^①年即父之儻。既可爲父爲師。所以最可尊敬。就顯而言。■王宮初生至靈山之會已年七十^②五。是有年也。就密而語。成佛已來已經七百萬億阿僧祇劫。是有年也。」(Kor.1468 p.29-14r, 11.9-12) とある。
- (45) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「財富無量。多有田宅及諸僮僕者。此顯有財。珍寶是財體。田宅是得處。僕從是營人。寶譬七財。田譬九定。宅譬三空。九定發慧如^③田。三空鎮神如宅。此謂功德田宅。非火宅也。」(Kor.1468 p.29-14r, 11.12-15) とある。
- (46) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「僮僕譬四^④有財。四僧窮子品解。」(Kor.1468 p.29-14r, 1.15 - p.30-14v, 1.1) とある。
- (47) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。其家廣大至止住其中者。第二愍處。自有三意。一宅大。二門少。三人多。宅大故難行。門少故難出。人多故難盡。其家廣大者。宅大也。宅即衆生本識。本識者。從初一念終極金剛。籠括空有網羅天地。攝持色根含藏識種。由斯義故。謂之大宅。時歷三僧祇位階五十聖悠悠長道故難行也。問。經既以三界爲宅。今以本識爲宅何也。答。三界豈異本識哉。只是本識變異耳。故經說。三界虛妄但是一心。舊大乘論。翻阿黎耶識爲家識。此即本識大宅之驗也。」(Kor.1468 p.30-14v, 11.1-9) とある。引用文中、「經說」とは、天親菩薩造菩提流支等訳『十地經論』卷第八に「經曰。是菩薩作是念三界虛妄但是一心作。」(T.26 no.1522 p.169a, 1.15) とあるように、『十地經』のことを指す。引用文中、「舊大乘論」とは、佛陀扇多訳『攝大乘論』卷上の「一切諸法家 彼識一切種 故說爲家識 聰明者乘此」(T.31 no.1592 p.97b, 1.27) に対応する。また、『法華問答』には「(18/3-4) 問。譬如長者有一火宅譬何法復以何法爲體 答。火宅譬於三界。

以衆以衆生本識爲體。本體者籠括空有網羅。天地攝搏色根含藏識種時歷三僧祇位階。五十聚悠悠長道故謂之火宅。舊翻阿頼耶識爲家識。斯火宅之馳也」(T.85 no.2752 p.200a, 11.12-18) と上記の『續述』とほぼ一致する文例が見られる。

- (48) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「唯一門者。門少也。一門所謂一法性門。九十六種外道教門。悉破法性。存人性皆不能出。唯有□佛教門破人性。存法性此門得出。故言一門。一即少也。■■■■約三乘。即有三門。若別約三乘。聲聞八萬法門。緣覺■■■法門。菩薩十億法門。何故言一。不言多也。答。約教■■■■隨根欲。即有多不相違也。」(Kor.1468 p.30-14v, 11.9-14) とある。
- (49) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「多諸人衆。一百二百■■■■止住其中者。人多也。五百人者。譬五道種子。問。五人足譬五道種子。今言五百有何意也。答。五道以十使爲通因。十業道爲別因。十使一起十業。十使乘十業。即有百業。一道有一百。五道即五百。但人天以十善爲一百。三塗以十惡爲一百。斯爲異耳。」(Kor.1468 p.30-14v, 11.14 - p.31-15r, 11.4) とある。また、『法華問答』に「(20/3-6) 問。是火宅中有五百人。人數何限獨以五百爲數 答。五百人者喻五道種子。以十業爲因以十使爲緣。因一使發十使發百業。一道有一百五道即五百故。以五百人譬五道種子也」(T.85 no.2752 p.200a, 11.25-29) とほぼ一致する文例が見られる。また、『法華問答』には「(91) 問。云何是度五百由旬。何者是化來。何者是寶所 答。五百比是要法三界爲三百二百喻習二乘涅槃。後一百即四住習二乘迴心已知初地。已知爲一百即五百。若以二乘爲二百者有妨。以化城是東果已度竟故。化城已後方便度二百。然二乘未過寶何故須進途二百二界即五道故不通爲五百總爲五百。言化城者無而忽有名之爲化。防非捍敵目之爲城。度三百由旬衆人度退。商主方便權說二乘滅諦涅槃解其疲倦。今前進同趣寶所。言寶者諸師不同。隨人有異。今案此文位當種性羅漢迴心位當十信。若論斷或初地齊功心位同十信。論其究竟佛地方息進求。今就大乘果滿故言寶。何者藏法師以三界爲三百。二原爲二即五百。惠淨法師以五道爲五百。三途爲三百。人天二百即五百。并此以宗三類不同。地意即同」とある。
- (50) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「止住其中者。即五道種子。冥伏在阿黎耶識中也。」(Kor.1468 p.31-15r, 11.4-5) とある。
- (51) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。堂閣朽故至梁棟傾危者。第三次明愍意。有二。一爲宅宇將傾。二爲宅火正發。宅宇譬衆生五陰。宅火譬衆生三毒。宇將傾故不可長保。火正發故宜應急出。此即初章。堂閣譬頭頂。牆壁譬皮肉。柱根譬骨節。梁棟譬筋脉。堂閣朽故者。髮白面皺。是頭老相。牆壁墮落者。肉消皮緩。是皮老相。柱根腐敗者。脚弱脊匾。是骨老相。梁棟傾危者。筋舉脉縮。是筋老相。色身既老。名身亦變。即五陰俱老也。」(Kor.1468 p.32-15v, 11.1-7) とある。また、『法華經玄贊要集』卷第二十四に「古人解。本喻中堂閣朽故。頭老相。牆壁墮落

- 者。皮相。柱根腐敗者。骨老相。樑棟危者。勛老相。」(SZ.34 no.638 p.692a, Ⅱ.14-16) とほぼ一致する文例が見られる。『要集』の引用文中、「古人解」とは、『法華經玄贊要集』巻第一に「言豈可以溟輪等者。破古人。見下經文。以山海爲況。便將山海。以況此經教理。問古人是誰。答即紀國淨法師。淨法師疏云。因以深同溟渤。高類須彌。照灼奪朗月之華。破闇齊白日之力。以況此經也。」(SZ.34 no.638 p.194b, Ⅱ.15-18) とあるように慧浄のことである。
- (52) 『妙法蓮華經續述』巻第五に「經曰。周匝俱時至焚燒舍宅者。此明宅火正發。五陰生八苦。八苦生三毒。八苦燒人身。三毒燒人心。身熱心熱。故曰。焚燒舍宅。」(Kor.1468 p.32-15v, Ⅱ.7-10) とある。
- (53) 『妙法蓮華經續述』巻第五に「經曰。長者諸子至在此宅中者。第四明愍境。境即三十子。一十譬菩薩根性。二十譬緣覺根性。三十譬聲聞根性。問。但言三子足譬三乘性。今言十者有何意耶。答。三乘各行十善。而成性故皆言十。故楞伽說。有五種十善人天及三乘。」(Kor.1468 p.32-15v, Ⅱ.10-14) とある。引用文中、「楞伽說」は典拠不明。
- (54) 曇無讖訳『大般涅槃經(北本)』巻第二十九に「云何非喩。如我昔告波斯匿王。大王。有親信人從四方來各作是言。大王。有四大山從四方來欲害人民。王若聞者當設何計。王言。世尊。設有此來無逃避處。●唯當專心持戒布施。我即讚言。善哉大王。我說四山即是衆生生老病死。生老病死常來切人。云何大王。不修戒施。王言。世尊。持戒布施得何等果。我言。大王。於人天中多受快樂。王言。世尊。尼拘陀樹持戒布施。亦於人天受安隱耶。我言。大王。尼拘陀樹不能持戒修行布施。如其能者則受無異。是名非喩。」【T.12 p.536 脚註②】「惟=唯㊦下同」(T.12 no.374 p.536c, Ⅱ.8-18) と、同箇所が惠嚴等訳『大般涅槃經(南本)』巻第二十七にも「云何非喩。如我昔告波斯匿王。大王。有親信人從四方來。各作是言。大王。有四大山從四方來欲害人民。王若聞者當設何計。王言。世尊。設有此來無逃避處。●唯當專心持戒布施。我即讚言。善哉大王。我說四山即是衆生生老病死。生老病死常來切人。云何大王。不修戒施。王言。世尊。持戒布施得何等果。我言。大王。於人天中多受快樂。王言。世尊。尼拘陀樹持戒布施。亦於人天受安樂●耶。我言。大王。尼拘陀樹不能持戒修行布施。如其能者則受無異。是名非喩。」【T.12 p.781 脚註⑦】「唯=惟㊦下同」【T.12 p.781 脚註⑧】「耶=也(福乙)」(T.12 no.375 p.781c, Ⅱ.8-19) とある。
- (55) 『妙法蓮華經續述』巻第五に「經曰。長者見是至即大驚怖者。第五愍心。長者見是大火者。謂以他心智。見子三毒之火也。從四面起者。涅槃以四面譬四山。四山即生老病死。此四是衆生重擔。故以譬山。生爲東面。老爲南面。病爲西面。死爲北面。見三毒之火。因四苦而生。故言。從四面起。」(Kor.1468 p.32-15v, Ⅱ.14 - p.33-16r, Ⅱ.3) とある。引用文中、「涅槃」の典拠は前掲の註参照。また、『法華

義疏』卷五に「四面起者即是生老病死。涅槃經取[●]譬四山。[●]今譬之四面。生爲東面。老爲南面。病爲西面。死爲北面。」【T.34 p.523 脚註⑩】「[譬]-(聖乙)【T.34 p.523 脚註⑪】「[今]-[●](爲譬)+今(聖乙)」(T.34 no.1721 p.523a, Ⅱ.16-18) とほぼ一致する文例が見られる。また、『法華問答』にも「(17/3-3) 問。長者見是大火從四面起。大火譬何法。四面譬何法 答。大火譬苦體。謂苦苦壞苦。四面譬苦具。謂生老病死。如來以他心智知衆生三苦之火。從生老病死而發故。言從四面起。生爲東面。老爲南面。病爲西面。死爲北面」(T.85 no.2752 p.200a, Ⅱ.8-13) とほぼ一致する文例が見られる。

- (56) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「即大驚怖者。見火怛愕曰[■]驚畏子被燒爲怖。驚譬如來大智。怖譬如來大悲。」(Kor.1468 p.33-16r, Ⅱ.3-4) とある。また、『法華義疏』卷五に「即大驚怖者第三明驚怖。別據三十子而言者。昔經受化不應致火。故驚。迷著苦境恐慧命將盡成一闌提。所以怖也。通就六道衆生釋者。一往怛愕曰驚。定知是可畏之事[●]稱怖。譬慈心一往與樂[●]稱驚。次起悲[●]心拔苦爲怖也。」【T.34 p.511 脚註⑫】「稱=秤(聖乙)*」【T.34 p.523 脚註⑬】「[心]-[●]」(T.34 no.1721 p.523a, Ⅱ.18-23) と類似する文例が見られる。また、『法華經玄贊要集』には「言悲生喻長者。長行經言。即大驚怖。紀國云。驚入火宅。身業起福。方宜救濟。欲陳八苦之言。令無燒害。便絕五燒之痛。問如來有十力四無所畏。如何有驚。答佛見衆生有苦。起悲心救濟名驚。驚即悲也。即同方便品。爲是衆生故。而起大悲心。即如來報身上。大圓鏡智。擊成所作智。起化身。託質摩耶夫人。右脇而誕。名驚入火宅。」(SZ.34 no.638 p.714c, Ⅱ.15-21) とある。
- (57) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。而作是念至安隱得出者。第六愍力。所燒之門。謂佛教門。約不信者。爲被燒。何者佛教之門。衆生不信即是衆生煩惱之火燒滅佛教之門。如來昔曰深生信向依之入道得出三界。故曰。安穩得出。」(Kor.1468 p.33-16r, Ⅱ.4-8) とある。
- (58) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。而諸子等至無求出意者。第七愍癡。樂著嬉戲者。由乎貪。不覺不知不驚不怖者。由乎癡。於生可覺而不覺。於老可知而不知。於病可驚而不驚。於死可怖而不怖。其猶癡馬。觸毛觸皮觸肉觸骨。至死不行。諸子亦爾。不覺生苦。不知老苦。不驚病苦。不怖死苦。」(Kor.1468 p.33-16r, Ⅱ.8-12) とある。
- (59) 『妙法蓮華經』「譬喻品」に「舍利弗。是長者作是思惟。[●]我身手有力。當以衣械。若以[●]机案。從舍出之。復更思惟。是舍唯有一門。而復狹小。諸子幼稚未有所識。戀著戲處。或當墮落爲火所燒。我當爲說怖畏之事。此舍已燒宜時疾出。無令爲火之所燒害。作是念已。如所思惟。具告諸子。汝等速出。父雖憐愍善言誘[●]喻。而諸子等。樂著嬉戲不肯信受。不驚不畏了無出心。亦復不知何者是火何者爲舍。云何爲失。但東西[●]走戲視父而已。」【T.9 p.12 脚註⑮】「我+(雖)⑯」【T.9 p.12 脚

註⑥「机=几㊦㊧傳」【T.9 p.12 脚註⑦】「喻=諭㊨」【T.9 p.12 脚註⑧】「走戲=馳走傳」(T.9 no.262 p.12b, l.23 - p.12c, l.4) とある。

- (60) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「身手有力者。身譬如來定力。手臂如來慧力。依禪定發五通現妙相之身。即定有力。依智慧用四辯舒正法之手。即慧有力。故合譬中云。有大神力及智慧力也。當以衣衾及以机案者。衣衾顯三十二相。机案顯平等大慧。從舍出之者。依定力現三十二相令其生信。即以定力出之。依慧力讚平等大慧令其生智。即以慧力出之。」(Kor.1468 p.34-16v, ll.3-9) とある。また、『法華問答』に「(21/3-7) 問。當以衣衾若以机案從舍出之。衣衾机案各譬何法 答。衣衾譬甚深禪定。机案譬平等大惠。禪定能起三十二相。令物至信大惠能說力所畏。今物生智。以此二用從舍出之」(T.85 no.2752 p.200a, l.29 - p.200b, l.4) とほぼ一致する文例が見られる。
- (61) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。復更思惟至而復狹小者。第二觀門小狹。一門者。舊解以一乘教爲一門。不容緣覺爲狹。不容聲聞爲小。若爾即二乘之人。不得出於門外。或曰。一乘之門。不容三有善根。故曰。狹小。若爾一乘之車。不載三有善根。即其車不得高廣。今依無明羅刹經。一門者。謂法性門。案唯一佛教立法性。破人性故言一門。三藏教中。不令二乘廣度衆生爲狹。不令求大菩提爲小。」(Kor.1468 p.34-16v, ll.9-15) とある。引用文中、「舊解」は典拠不明。ただし、『法華經玄贊要集』卷第五に「言復云唯一門等者。問大乘寬廣。何言狹小。答如大海雖寬。不宿死屍。亦名爲少。今者大乘雖寬。不容聲聞。名之爲狹。不容緣覺。名之爲少。」(SZ.34 no.638 p.281b, ll.6-8) と「舊解」の説にほぼ一致する文例が見られる。また、引用文中、「無明羅刹經」は典拠不明。智昇撰(CE.730)『開元釋教錄』卷第四に「無明羅刹集一卷(亦云無明羅刹經或二卷) 右二十部六十五卷。並是見入藏經。似是秦時譯出(數本經中並有秦言之字) 諸失譯錄並未曾載。今附此秦錄。庶免遺漏焉。」(T.55 no.2154 p.519a, ll.3-6) とあるが、本箇所は、失訳人名附秦錄『無明羅刹集』(T.16 no.720) には見当たらない。また、『法華問答』に「(19/3-5) 問。何故火宅唯一門而復狹小 答。唯一佛教能背火宅。諸外道教不能出故曰唯一門。小乘教中不人人小乘闊度衆生所以言狹小。今小乘求大菩提。何以言小。然則大能權小所以菩薩從中而出不心怖大所以二乘不問大門。而以是故窮子門側則悔來至此。長者放命便則外走也」(T.85 no.2752 p.200b, ll.17-20) と類似する文例が見られる。
- (62) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「問。設車以誘三根。言三不言其一。開門以出三子。即言一不言其三何也。答。門可貴賤同行。所以言一。不言其三。車則尊卑別載。所以言三。不言其一。」(Kor.1468 p.35-17r, ll.7-10) とある。また、『法華問答』に「(26/3-12) 問。設車以誘諸子言不其開問以出諸子言一不言三何也 答。問可貴賤同行所以言一不言三。車則尊卑別載所以言二不言一」(T.85 no.2752 p.200a,

Ⅱ.18-25) とほぼ一致する文例が見られる。

- (63) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。諸子幼稚至戀著戲處者。第三憐子幼稚。此即求勢力人。學道之年既從覆障之情尚重癡故。仍昏二乘之教愛故尚沈五欲之境。故曰。未有所識戀著戲處。」(Kor.1468 p.35-17r, Ⅱ.11-14) とある。
- (64) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。或當墮落爲火所燒者。第四恐陷火災。投入夜光。鮮不案劍。爲說妙法。多生謗心。謗心亦起大坑即入。故曰。爲火所燒。」(Kor.1468 p.35-17r, Ⅱ.14 - p.36-17v, Ⅱ.1) とある。また、房玄齡 (CE.578-648) 撰『晋書』「列傳第六十二(卷九十二)」に「又北土之性，難以托根，投入夜光，鮮不按劍。」[<http://www.xysa.net/a200/h350/05jinshu/t-092.htm>] (p.1629) と類似する文例が見られる。とくに房玄齡は、慧浄が綴文にあたった無著造世親釈波羅頗蜜多羅訳『大乘莊嚴經論』(T.31 no.1604) の勘定に参助している。詳しくは、道宣 (CE.596-667) 撰『續高僧傳』卷第三 (T.50 no.2060 p.440ab) 参照。
- (65) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。父雖憐惑至了無出心者。第七子不承訓。父雖憐惑者。心悲欲拔之。善言誘喻者。口悲欲引之。樂著嬉戲者。由愛多。不肯信受者。由見重。不驚不畏者。是無明。了無出心者。是懈怠。」(Kor.1468 p.36-17v, Ⅱ.3-6) とある。
- (66) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。亦復不知至視父而已者。第八父歎沈淪。不知何者是火者。不識三毒爲災。不知何者爲舍者。不識五陰爲室。云何爲失者。不了三苦爲患。東西譬苦集。南北譬滅道。毗婆沙云。東方爲苦諦最初故。西方爲集諦對苦故。北方爲滅諦最上故。南方爲道諦福田處故。子淪苦集。即是走戲東西。父證滅道可謂往來南北。未能隨逐但可顧瞻而已。」(Kor.1468 p.36-17v, Ⅱ.6-12) とある。引用文中、「毗婆沙云」とは、迦旃延子造五百羅漢訳陀跋摩訳 (CE.437) 『阿毘曇毘婆沙論』卷第四十に「問曰。何方與何諦相似。答曰。東方當知如苦諦。西方如集諦。如行者見諦時。前見苦諦。後見集諦。復有說者。東方是集諦。西方是苦諦。是因果法。前因後果故。南方如道諦。所以者何。道諦是福田故。北方如滅諦。滅諦無有上故。」(T.28 no.1546 p.299a, Ⅱ.21-26) と、同箇所が五百大阿羅漢等造玄奘 (CE.651-654) 訳 (CE.656) 『阿毘達磨大毘婆沙論』卷第一百四十三には「問佛於何諦說何方聲。答佛於苦諦說東方聲。於彼集諦說西方聲。以現觀時先觀苦諦次觀集故。有作是說。東方如集西方如苦。先因後果次第說故。佛於道諦說南方聲。道諦南方俱應供故。佛於滅諦說北方聲。滅諦北方俱最勝故。」(T.27 no.1545 p.400c, Ⅱ.20-26) とある。また、『法華問答』に「(22/3-8) 問。云何名爲東西走戲視父而已 答。東方爲苦諦。西方爲集諦。北方爲滅諦。南方爲道諦。子證苦即是走戲東西。父證滅道即是往還南北。東能隨逐。但可顧瞻而已。雖未隨父。終有會化之期故言視父」(T.85 no.2752 p.200b, Ⅱ.4-9) とほぼ一致する文例が見られる。

- (67) 『妙法蓮華經』「譬喻品」に「爾時長者卽作是念。此舍已爲大火所燒。我及諸子。若不時出。必爲所焚。我今當設方便。令諸子等得免斯害。父知諸子先心各有所好。種種珍玩奇異之物情必樂著。而告之言。汝等所可玩好希有難得。汝若不取後必憂悔。如此種種●羊車●鹿車●牛車今在門外。可以遊戲。汝等於此火宅宜速出來。隨汝所欲皆當與汝。爾時諸子聞父所說。珍玩之物適其願故。心各勇銳互相推排。競共馳走爭出火宅。是時長者。見諸子等安隱得出。皆於四衢道中露地而坐。無復障礙。其心泰然歡喜踊躍。時諸子等。各白父言。父先所許玩好之具。羊車鹿車牛車願時賜與」【T.9 p.12 脚註⑨】「羊車 Aja-ratha.」【T.9 p.12 脚註⑩】「鹿車 Mrga-ratha.」【T.9 p.12 脚註⑪】「牛車 Go-ratha.」(T.9 no.262 p.12c, Ⅱ.4-17) とある。
- (68) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「此卽慮其當禍。夫舍既被燒而癡子不出。父心顧戀則同陷火災。此卽衆生病。故菩薩亦病。故曰。我及諸子。若不時出。必爲所焚也。」(Kor.1468 p.37-18r, Ⅱ.3-5) とある。
- (69) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。我今當設至得免斯害者。此卽思其現方。我今當設方便者。欲構三車之術。令諸子等得免斯害者。令絕五痛之災。」(Kor.1468 p.37-18r, Ⅱ.5-7) とある。
- (70) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。父知諸子至情必樂著者。此卽察其宿好。卽以宿命智。知子過去根欲性也。」(Kor.1468 p.37-18r, Ⅱ.7-9) とある。
- (71) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。爾時諸子至爭出火宅者。此明諸子受術。聞說珍玩者。譬受三乘教。適其願故者。譬稱三乘機。心各勇銳者。譬彼心精進。謂依教以思理。互相推排者。譬彼身精進。謂依理以起行。競共馳走者。譬登八正之路。爭出火宅者。譬免五痛之災快乎哉。慈父之祕榮於斯方効矣。」(Kor.1468 p.40-19v, Ⅱ.1-6) とある。また、『法華問答』に「(31/3-17) 問。云何名互相推排競共馳走爭出火宅 答。互相推排者爲所狹小。競共馳走者。譬登八正之路。爭出火宅者。譬免五痛之災。五痛者破五戒得五燒爲五痛。出無量壽經」とほぼ一致する文例が見られる。また、基 (CE.632-682) 撰『妙法蓮華經玄贊』卷第五末に「經。爾時諸子 (至) 爭出火宅。贊曰。自下第四依言免難離。有二。初子免災難後父遂心安。此初也。適者稱悅稱悅三乘所欣心。故名爲適願。心各勇銳心精進也。勇者進銳者利。善精進也。互相推排身精進。亦語精進也。排欣推也推亦讓也。推音尺佐反無土雷反。身業遞相力勵及語業相勸勵。名互相推排。爭修行業名競馳走。齊希免苦名爭出宅。」(T.34 no.1723 p.749c, Ⅱ.15-23) と類似する文例が見られる。
- (72) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。是時長者至歡喜踊躍者。此明長者喜術。四衢道中者。譬入四諦觀。阿含經以四衢譬。四諦見道斷惑。如溝巷故。譬之以爲衢。故經說。須陀洹人溝巷道斷結。露地而坐者。譬入無學心。聖地有三。一見地。二修地。三無學地。前二地有障可言覆。第三地無障故言露。所作已辦身心俱得倚息

故言而坐。三等縛解大明雲除。故言無復障礙。衆生病愈菩薩亦愈。故曰。其心泰然歡喜踴躍。問。諸子受術同免火災。二乘出門既到無學。菩薩出宅復至何階。答。菩薩出宅即登初地以至此地斷退因故。故下頌云。具足三明。及六神通。有」(Kor.1468 p.40-19v, ll.6-15) とある。引用文中、「經說」は典拠不明。ただし、吉藏撰『金剛般若經義疏』卷第三に「餘經云得須陀。名爲溝巷斷結。」(T.33 no.1699 p.110b, ll.12-13) と類似する文例が見られる。以下、現存本『續述』には2枚(20張の左右)の欠損がある。ただし、『法華經玄贊要集』卷第二十四に「經言露地等者。紀國云。聖地有三。一見地。二修地。三無學地。前二地有障故。可言有覆。第三地永斷三障。故言露地。問初果之人悟四諦理。何不名露地。答雖然證四諦理。煩惱未盡。不名露地坐。前三果有學。雖坐宅內坐。今說宅外免難之人。唯取無學也。問小聖有學受變易身。得理出宅。何不名口坐四衢耶。答今此不約迴心受變易者說。但據未迴心得自果未受變易者說。唯取無學未受變易者。得無學果後。三十二十年。只現在身上爲後邊。五蘊身永更不續。一則出宅。二得四諦理具足。故得坐名。初地菩薩亦只取未受變易前身。名路地坐。名出宅也。若爾初地菩薩尚有餘障。應同初果。不坐四衢。答則云。彼能伏伏三障。現行盡故。亦得名露地坐也。各有所依等者。三乘理也。問二乘無學斷三障盡。故名果滿之位。菩薩在因。何名果滿也。答初地菩薩雖亦在因。證盡當地二空理。亦出分段。同於二乘。故言果滿位也。」(SZ.34 no.638 p.681c, l.16 - p.682a, l.7) とあり、下線部が『妙法蓮華經續述』卷第五(Kor.1468 p.40-19v, ll.9-11)に該当するため、これ以降は現存本『續述』の欠損箇所と考虑されると考えられる。また、『法華問答』に「(23/3-9) 問。云何名皆四衢道中露地而坐 答。四衢道中。謂四諦心見中學地有障可言覆無學障盡故言路。所作已辨故言而坐」(T.85 no.2752 p.200b, ll.9-12) とほぼ一致する文例が見られる。

- (73) 以下、『論義』の404行目の「羊車鹿車」から410行目の「令以化衆生」までは、現存本『續述』の欠損した20張(Kor.1468 p.20rv)に相当するために対比し得ない。したがって本箇所は、現存本『續述』の欠損箇所の一抔を伝える貴重な史料となる。
- (74) 『妙法蓮華經』「譬喻品」に「舍利弗。爾時長者。各賜諸子等一大車。其車高廣衆寶莊校。周匝欄楯四面懸鈴。又於其上張設幃蓋。亦以珍奇雜寶而嚴飾之。寶繩紋絡垂諸華纓。重敷純綖安置丹枕。駕以白牛。膚色充潔形體殊好。有大筋力。行步平正。其疾如風。又多僕從而侍衛之。所以者何。是大長者。財富無量。種種諸藏悉皆充溢。而作是念。我財物無極。不應以下劣小車與諸子等。今此幼童皆是吾子。愛無偏黨。我有如是七寶大車。其數無量。應當等心各各與之。不宜差別。所以者何。以我此物周給一國。猶尚不匱。何況諸子。是時諸子。各乘大車得未曾有。非本所望。」【T.9 p.12 脚註⑫】「奇=琦⑬」【T.9 p.12 脚註⑭】「紋=交⑮⑯

- 【傳】【T.9 p.12 脚註①】「統筵＝統筵〔宋〕元，＝婉筵〔明〕，＝緹筵〔密〕」(T.9 no.262 p.12c, l.18 - p.13a, l.1) とある。
- (75) 龍樹菩薩造鳩摩羅什訳 (CE.405)『大智度論』卷第二に「佛一切智爲大車 八正道行入涅槃」(T.25 no.1509 p.72a, l.14) とある。また、『法華問答』には「(32/3-18) 問。云何名等一大車復駕以白牛 答。以一切智爲大車。駕以白牛者。以大悲爲白牛。車以運載爲義。悲拔苦爲能。非智運拔衆生如牛引物故。涅槃云。是故稱佛爲大。非牛」【T.85 p.200 脚註①】「非＝悲？*」(T.85 no.2752 p.200c, ll.10-14) とある。
- (76) 『法華經玄贊要集』卷第二十四に「紀國云。長者車上周匝。盡是欄楯也。欄持諸子而不出。楯防外人而不入。如來智上。周匝盡是總持。持內善而不出。防外惡而不入也。」(SZ.34 no.638 p.686b, l.24 - p.686c, l.3) と、また、慧浄述『阿彌陀經義述』にも「述曰。下明開宗廣釋有五。一明寶欄楯林嚴。二明寶池華光嚴。三明寶樂神通嚴。四明寶鳥法音嚴。五明寶樹搖風嚴。此是第一寶欄楯林嚴。有六。一寶欄。二寶楯。三寶羅林。六寶樹嚴。欄持內德。楯防外。羅網誓以珠繩。無漏法。芝林西方功德法莊嚴國界也。」【T.37 p.309 脚註①】「羅+(四寶網五寶)カ原」【T.37 p.309 脚註②】「無+(隔)イ原」【T.37 p.309 脚註③】「林+(樹是)カ原」(T.37 no.1756 p.309a, ll.8-13) と類似する文例が見られる。
- (77) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「次嚴外。亦有三德。一四等。二四弘。三四攝。張設幢蓋者。田□等。長者幢蓋。則高出而下覆如來四等。亦爾高出六子下覆四生六子謂四果緣覺菩薩也。寶繩交絡者。用四弘也。夫幢不施絡。則飄鼓不定綱以珠繩。則住持不動如來之車。亦爾若智無大誓。則普載之情。或動御以四弘。則廣運之心恒定也。垂諸華纓者。用四攝也。華纓垂下。則悅物來衆四攝俯順。則忻歸若林也。」(Kor.1468 p.41-21r, ll.1-7) とある。また、『法華經玄贊要集』卷第二十四に「經垂諸華纓者。紀國云。華纓垂下則悅。總成衆四攝。俯順於物若林。喻上說車。四面更垂華纓莊嚴。法中論四攝法也。」(SZ.34 no.638 p.687a, ll.11-13) と類似する文例が見られる。
- (78) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。重敷統筵安置丹枕者。此嚴內也。統筵譬八禪丹枕譬滅定。敷筵置枕。是眠臥之儀。入定滅心。則蘇息之狀。故經說。佛究竟臥阿羅漢眠也。」(Kor.1468 p.41-21r, ll.7-10) とある。引用文中、「經說」は典拠不明。また、『法華經玄贊要集』卷第二十四に「經言安置丹枕者。敷筵置枕。是眠臥之儀。入定滅心。則蘇息之體狀。」(SZ.34 no.638 p.687b, ll.13-14) とほぼ一致する文例が見られる。
- (79) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。駕以白牛至其疾如風者。次與牛也。牛譬如來大悲。大悲以無癡善根爲體。故言白隨逐衆生如犢子隨母故言牛。涅槃經云。隨逐衆生如犢子。是故號佛大悲牛。膚色充潔者。充實也。潔淨也。牛則膚充色潔。

悲則內貞外朗。形體姝好者。牛則高下應量觀者。謂之姝好。悲則怨親合機受者。謂之性正。有大筋力者。衆生以五陰爲重擔如來以四生爲重擔。牛則引大車而現力。悲則荷重擔而呈功。行步平正者。牛則不隔夷險高下一切平行。悲則不限怨親是非一切等觀。其疾如風者。餘人之悲假作心而去緩。如來之悲住自然而去速。攝大乘論曰。如衆生根性。極解脫眞道。於十方界說。能無功用心。」(Kor.1468 p.41-21r, l.10 - p.42-21v, l.5) とある。引用文中、「涅槃經云」の典拠は後掲の註参照。また、引用文中、「攝大乘論曰」とは、世親菩薩釈眞諦 (CE.499-569) 訳『攝大乘論釋』卷第一 (T.31 no.1595 p.153c, ll.11-12) に対応する。また、『法華經玄贊要集』卷第二十四に「言白牛體等者。車須得牛引。後得智事須得根本智引也。紀國以本悲爲牛力。用善根爲牛。牛自體故。嘉祥以大慧爲牛。」(SZ.34 no.638 p.687c, ll.4-6) と類似する文例が、同巻に「言侏有侏儒者。短人也。無莊好等義也。紀國云。牛則高下應量觀。人者謂之姝好也。」(SZ.34 no.638 p.688b, ll.12-13) ・「言五有大筋力者。紀國云。牛則大車而現力。悲則荷重擔而呈功。」(SZ.34 no.638 p.688b, ll.16-17) とほぼ一致する文例が見られる。

- (80) 『大般涅槃經(北本)』卷第三十八に「佛隨世間如犢子 是故得名大悲牛」(T.12 no.374 p.590a, l.26) と、同箇所が『大般涅槃經(南本)』卷第三十四にも「佛隨世間如犢子 是故得名大悲牛」(T.12 no.375 p.838a, l.9) とある。
- (81) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。又多僕從而侍衛之者。次與從也。此令攝怨怨謂衆魔外道。故經說。衆魔外道皆吾侍也。」(Kor.1468 p.42-21v, ll.5-7) とある。引用文中、「經說」とは、鳩摩羅什訳 (CE.406) 『維摩詰所說經』巻中の「又問。諸佛解脫當於何求。答曰。當於一切衆生心中求。又仁所問何無侍者。一切衆魔及諸外道皆吾侍也。所以者何。衆魔者樂生死。菩薩於生死而不捨。外道者樂諸見。菩薩於諸見而不動。」(T.14 no.475 p.544c, ll.6-10) に対応する。
- (82) 『妙法蓮華經』「譬喻品」に「佛告舍利弗。善哉善哉。如汝所言。舍利弗。如來亦復如是。則爲一切世間之父。於諸怖畏哀惱憂患無明闇蔽。永盡無餘。而悉成就無量知見力無所畏有大神力及智慧力。具足方便智慧波羅蜜。大慈大悲常無懈倦。恒求善事利益一切。而生三界朽故火宅。爲度衆生老病死憂患悲苦惱愚癡闇蔽三毒之火。教化令得阿耨多羅三藐三菩提。見諸衆生爲生老病死憂患悲苦惱之所燒煮。亦以五欲財利故受種種苦。又以貪著追求故現受衆苦。後受地獄畜生餓鬼之苦。若生天上及在人間。貧窮困苦愛別離苦怨憎會苦。如是等種種諸苦。衆生沒在其中。歡喜遊戲。不覺不知。不驚不怖。亦不生厭不求解脫。於此三界火宅東西馳走。雖遭大苦不以爲患。」【T.9 p.13 脚註①】「困=苦博」【T.9 p.13 脚註②】「怨=冤(元明)」(T.9 no.262 p.13a, ll.10-26) とある。
- (83) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。而生三界至三菩提者。此第二合愍處也。愍處則三界。如來本由大智故已出。今由大悲故復生。」(Kor.1468 p.45-23r, ll.4-6)

とある。

- (84) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。見諸衆生至之所燒煮者。次合愍境。譬由見諸子受諸苦故。自有七重。一見內緣苦。二見外緣苦。三見現報苦。四見生報苦。五見後報苦。六見沈沒苦。七見迷惑苦。此第一見內緣苦。生老病死是苦緣。能生苦故。憂悲苦惱是苦體。性逼迫故。」(Kor.1468 p.47-24r, ll.4-8) とある。
- (85) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「復次胎位苦故。臨受生時赤白和合。有識來託受難穢苦。迦羅邏等位。受轉熟苦。如癰熟時。既堅實已身分生時。受迫大苦。在胎臥時兩藏重逼。下蒸上壓受大困苦。由母飲食威儀失度。若走若跨。役力被打。服相違食。枝節如解。受種種苦。如犯王法受諸拷楚。臨出胎時。其身柔軟如芭蕉心。產門迤逼。受壓迤苦。初出生時身如新瘡。手水衣觸如熱灰灌。如刀劍解。受難忍苦。故說生苦。」(Kor.1468 p.48-24v, ll.2-9) とある。本箇所は、婆藪跋摩造眞諦訳『四諦論』卷第一の「復次胎位苦故。臨受生時赤白和合。有識來託受難穢苦。次柯羅囉。頗浮陀伽那。卑尸等位。受轉熟苦。如癰熟苦。既堅實已身分生時。受迫大苦。如大家苦。在胎臥時兩藏重逼。譬如罪人下蒸上壓受大[●]困。由母飲食威儀失度。若走若跨若行泗水。伸屈役力被打痛惱。服相違食。由此威儀飲食故。[●]支節如解。受種種苦。如犯王法受諸拷楚。故生爲苦。臨出胎時。其身柔軟如芭蕉心。產門迤逼如壓油車。受壓迤苦。又初出胎時身如新瘡。手水衣觸如熱灰灌。如刀劍解。受難忍苦。故說生苦。」【T.32 p.381 脚註⑤】「囉=邏(三)◎*」【T.32 p.381 脚註①】「困+(苦)(三)◎」【T.32 p.382 脚註①】「支=肢(三)◎*」(T.32 no.1647 p.381c, l.24 - p.382a, l.6) からの引用である。
- (86) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「老者。諸行變異。是名爲老。復次微細過根遍入諸物現故壞相。是法名老。何以故是老。入齒齒落。入皮皮緩。入毛毛白。入大大疎。入根根弱。入背背屈。入支支差。入身身則戰動不安。入心心則掉蕩忘失。能現此相是名爲老。」(Kor.1468 p.48-24v, l.12 - p.49-25r, l.1) とある。本箇所は、『四諦論』卷第一の「復次微細過根。遍入物中。後時方了減損變異。此法名老。何以故。老若入齒則現落相。若入皮中皮則緩皺百種[●]黎[●]羴。若入毛髮則現脫白。若入四大大則疎弱。若入根門則根無力。若入身形體戰動舉止不安。若入於心心則掉蕩忘失憶智。若入背脊則偻屈。若入[●]支節支節蹉戾。少壯軟滑悉皆失故。現故壞相。」【T.32 p.382 脚註⑥】「黎=羴(三)◎」【T.32 p.382 脚註④】「羴=黯(三)◎」【T.32 p.382 脚註①】「支=肢(三)◎*」(T.32 no.1647 p.382b, ll.3-10) からの援用である。
- (87) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「問。云何病苦。答。違自能故。譬如火爲燒因。能害本故。譬如蕉竹蘆葦。生痛受故。譬如火毒。苦苦攝故。譬如象子落野火中。不自在故。」(Kor.1468 p.49-25r, ll.12-14) とある。
- (88) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「問。云何死苦。答。重怖畏故是人臨終。應往他方。非所究悉。將離親愛。身屋崩倒。永離所作。生重怖畏。故說死苦。復次死王至者。

如劫末日燒暴一切。如金剛霹靂碎五陰山。如大猛風拔倒身樹。故名死苦。是生老病死。俱爲苦緣。憂悲苦惱。即是苦體。憂悲是心。苦心苦在意識。苦惱是身。苦身苦在五識。由彼四緣生此二熱故。經曰。亦以五欲財利故受種種苦者。此在身外亦爲苦緣故。五欲可愛故。故名爲欲得之。即資身悅已故名。數。或非衆生數衆生數者。五陰十二入衆生數者。二陰六入六界攝。爲此二利三時受苦。或現受或生受或後受。故曰。以五欲財利受種種苦。」(Kor.1468 p.51-26r, l.8 - p.52-26v, l.5) とある。本箇所は、『四諦論』卷第二の「云何死苦者。答怖畏苦故。是人臨終爲死金剛之所破壞。應往他方。非所究悉。將離親友。我之愛熱所護身屋崩破壞時。永離所作生重怖畏。故說死苦。」(T.32 no.1647 p.384a, ll.9-12) からの引用である。

- (89) 『大智度論』卷第六十二に「憂愁是心苦。惱是身苦。」【T.25 no.1509 p.502 脚註 ③】「(苦) + 惱(ㄅㄠˇ) (T.25 no.1509 p.502a, 11.22-23) とある。
- (90) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。又以貪著追求故現受衆苦者。此第三見現報苦。由求五欲。現在復三時受苦。謂覓守失時。覓時生動勞苦。守時生怖畏苦。失時生熱惱苦。故曰。現受衆苦。經曰。後受地獄畜生餓鬼之苦者。此第四見生報苦。由非法求利。故墮三塗受生報苦。」(Kor.1468 p.52-26v, 11.5-9) とある。
- (91) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「地獄有三。一熱二寒三邊。熱地獄。薩婆多部有八。一等活。亦名更生。亦名更活。或獄卒唱生。或冷風吹活。兩緣雖異令活一等。故名等活。二名黑繩。先以繩拊後以斧斫。三名衆合。亦名衆擣。兩山下合以擣罪人。四名呼呼。亦名叫喚。獄卒遍追叫呼而走。五名大呼。亦名大叫喚。四山火起欲逃無路。故大叫喚。六名熱。亦名燒燃。火鐵狹迤於中受熱。七名衆熱。亦名大燒燃。山火相搏燒炙罪人。八名無擇。亦名無間。一投苦火永無樂間。既無樂間何所可擇。此八在閻浮洲下重累而住。依三度論。前二有主治。次三少主治。後三無主治。然此八爲本。一一各有十六圍。一面有四。四面合十六。通本爲十七。八箇十七。合有一百三十六所。罪人於中受熱惱苦。寒地獄亦八。一頹浮陀。由寒苦所切肉生細胞。二尼賴浮陀。由寒風所吹通身成胞。三阿吒吒。由臂不得動唯舌得動。故作此聲。四阿波波。由舌不得動唯臂得動。故作此聲。五嘔喉。由臂舌皆不得動振氣。故作此聲。六鬱波羅。此是青蓮華。此華葉細由肉色細垢似此華開。七波頭摩。此是赤蓮華。由肉色大垢似此華開。八分陀利。此是白蓮華。由彼骨垢似此華開。前二從身相受名。次三從聲相受名。後三從瘡相受名。故俱舍論。於此八中衆生極寒所逼。由身聲瘡變異相。故立此名。依三度論。前一爲了叫。次三不了叫。後四不叫。此八在四洲間著鐵圍山底。仰向居止。罪人於中受寒凍苦。邊者。依三度論。亦三。一山間。二水間。三曠野。受別業報。案此應寒熱雜受。」(Kor.1468 p.52-26v, 1.9 - p.54-27v, 1.2) とある。引用文中、「俱舍論」とは、婆藪盤豆造真諦訳(CE.563-567)『阿毘達磨俱舍釋論』卷第八の「於此八中衆生極寒所逼。由身聲瘡

變異相。故立此名。」(T.29 no.1559 p.216a, l.29 - p.216b, l.1) に対応する。また、同箇所が世親造玄奘訳『阿毘達磨俱舍論』卷第十一には「此中有情嚴寒所逼隨身聲變以立其名。」(T.29 no.1558 p.59a, ll.3-4) とある。また、引用文中、「依三度論」の三箇所の典拠は、瞿曇僧伽提婆訳『三法度論』卷下の「問云何熱地獄。答熱地獄者。有主治少主治無主治。此三相[●]觀相」【T.25 p.27 脚註⑩】「觀+(觀)㊦」(T.25 no.1506 p.27b, ll.24-25)、「問云何寒地獄。答寒地獄者。了叫喚。不了叫喚。不叫喚。是三相觀相寒地獄。……(中略)……是一切[●]十寒地獄。處在四洲間。著鐵圍大鐵圍山底。仰向居止在閻中。寒風壞身體。大火所然。」【T.25 p.27 脚註⑪】「十=大[●]宋[●]元[●]宮, =天[●]明」(T.25 no.1506 p.27a, l.18 - p.27b, l.19)、「問云何邊地獄。答邊地獄者。所在處水間山間及曠野。獨一受惡業報。」(T.25 no.1506 p.28a, ll.17-18) に対応する。とくに『續述』の本箇所は、道世撰(CE.668)『法苑珠林』卷第七に「又三法度論經云。地獄有三。一熱二寒三邊。熱地獄者。依薩婆多部有八大地獄。一等活。亦名更活。或獄卒唱生。或冷風吹活。兩緣雖異合活一等。名等活地獄。二名黑繩地獄。先以繩[●]緋後以斧斫。三名衆合地獄。亦名衆[●]磔兩山下合以[●]磔罪人。四名呼呼地獄。亦名叫喚地獄。獄卒逼趁叫呼而走。五名大呼。亦名大叫喚地獄。四[●]大火起欲逃無路。故名大叫喚地獄。六名熱地獄。亦名燒然。火鐵狹近於中受熱。七名衆熱地獄。亦名大燒然。山火相[●]爆[●]弗炙罪人。八名無擇地獄。亦名無間。一[●]投苦火永無樂間。既苦無間何所可擇。此八地獄在閻浮洲[●]重[●]壘而住。依三法度論云。前二有主治。次三少主治。從三無主治。然此八爲本。一一各有十六圍。一面有四。四四而合。總有十六。通本爲十七。八箇十七。合有一百三十六所。罪人於中受熱惱苦。第二寒地獄亦八。一名頽浮陀地獄。由寒苦所切肉生細皰。二名泥賴浮陀地獄。由寒風吹通身成皰。三名阿吒吒地獄。由臂動不得唯舌得動。故作此聲。四名阿波波地獄。由舌不得動唯臂得動。故作此聲。五名嘔喉地獄。由臂舌不得動以[●]唯喉內振氣。故作此聲。六名霹波羅地獄。此是青蓮華。此華葉細由肉色細[●]似此華[●]烈[●]日而開。七名波頭摩地獄。此是赤蓮華。由肉色大[●]圻似此華開。八名分陀利地獄。此是白蓮華。由彼骨[●]圻似此華開。前二從身相受名。次三從聲相受名。[●]後三從瘡相受名。故俱舍論云。於此八中衆生極寒所逼。由身聲瘡變異。故立此名。依三法度論云。前二爲可叫。次[●]四不可叫。從三不叫。此八在洲間著鐵圍山底。仰向居止。罪人於中受寒凍苦。第三邊地獄者。依三法度論云。亦三。一山間。二水間。三曠野。受別業報。此應寒熱雜受。若論壽報命有延促。」【T.53 p.326 脚註①】「緋=緋[●]宮」【T.53 p.326 脚註②】「磔=擗[●]宮, =植[●]元[●]」【T.53 p.326 脚註③】「大=山[●]宮」【T.53 p.326 脚註④】「爆=博[●]宮」【T.53 p.326 脚註⑤】「弗=鏑[●]宮」【T.53 p.326 脚註⑥】「投=授[●]宮」【T.53 p.326 脚註⑦】「(下)+重[●]宮」【T.53 p.326 脚註⑧】「壘=累[●]宮」【T.53 p.326 脚註⑨】「[唯]-[●]宮」【T.53 p.326 脚註⑩】「烈=裂[●]元[●]明」【T.53 p.326 脚註⑪】

「(對)+日㊦」【T.53 p.326 脚註⑩】「後=從㊦」【T.53 p.326 脚註⑪】「四=三㊦」(T.53 no.2122 p.326a, l.2 - p.326b, l.7) とほぼ一致する文例が見られる。両者にほぼ一致する同文例が見られることから、道世は『三法度論』を直接ではなく、先行する慧浄の『續述』より引用したものと考えられる。

- (92) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「畜生者。三度亦三。一水行。二陸行。三空行。三行。□□一無足。二二足。三多足。此九受相害苦。餓鬼者。三度亦三。一無財鬼。二少財鬼。三多財鬼。此三各三合有九鬼。無財三者。一炬口鬼。火從口出如野火燒樹。二針口鬼。腹大如山咽如針孔。三臭口鬼。口爛腐臭猶如糞廁。此三並不得食。故曰無財。少財三者。一針毛鬼。毛長旦利行便自刺。二臭毛鬼。毛臭覆身自拔受苦。三大癭鬼。咽垂大癭自決噉膿。此三少得不淨食。故曰少財。多財三者。一得棄鬼。恒得祭祀所棄食。二得失鬼。恒得街衢所遺食。三大熱鬼。□□夜叉二羅刹三毗舍闍。此三境界如天。恒得妙食由無量餓鬼所遺食化爲膿受是苦報。此三得食。故曰多財。若人非法求利多於生報受。三塗苦。」(Kor.1468 p.54-27v, ll.2-13) とある。本箇所は、『三法度論』卷下の「問已說地獄。云何畜生。答畜生者。陸水空行。一切無足二足多足。陸行水行空行。此三是畜生。陸行者。象馬牛羊驢騾駱駝爲首。水行者。魚摩竭失收摩賴爲首。空行者。鳥及蚊蚋爲首。一切無足二足多足。無足者蛇爲首。二足者鳥爲首。多足者牛馬蜂及百足爲首。彼一切種種大罪業行生彼中。是謂畜生。問已說畜生。云何餓鬼。答餓鬼者。無財少財多財。無財少財多財者。此三種是餓鬼。問云何無財。答無財者。炬針臭口。炬口針口臭口。是三種無財。炬口者。合口猛火炎從口出自燒。如野火燒多羅樹。彼於此間多行慳貪故生彼受苦。針口者。腹大如山谷。咽如針孔。設得豐饒食而不得食。臭口者。口爛腐臭。如糞廁自噉氣臭。無腹不得食受大苦。是謂無財。問云何少財。答少財者。針臭毛癭。針毛臭毛癭者。此三種是少財。彼或時少得不淨物故說少財。針毛者。毛極堅長頭利如針覆身。遍滿自體節節相離。行來甚難毛還自刺。如利箭射鹿。受極大苦。或時少得食。臭毛者。毛極臭覆身。更互自刺體。身臭風發惱生。膿患自拔毛。受如此苦。癭者。自罪業報生癭。還自決破膿血流出。取而食之。是謂少財。問云何多財。答多財者棄。失大勢。棄失大勢此三種是多財。棄者若宿命施放得殘。彼終身祭祠得。由此故得樂。失者。街巷四道所遺落者。彼終身得。由此故得樂。大勢者。夜叉羅刹毘舍遮。夜叉羅刹毘舍遮。此三種是大勢。彼境界如天。宿命福德故。或得妙食。食已無量餓鬼圍繞相見生苦。如人在獄見親生苦。彼亦如是圍繞生苦。由此故食化爲膿。受如是苦是謂大勢。」【T.25 p.28 脚註⑤】「受苦=云何名㊦」【T.25 p.28 脚註⑥】「咽=咽㊦」【T.25 p.28 脚註⑦】「針+(毛)㊦」【T.25 p.28 脚註⑧】「癭=癭㊦下同」【T.25 p.28 脚註⑨】「膿=值㊦」【T.25 p.28 脚註⑩】「毘=庫㊦*」(T.25 no.1506 p.28a, l.19 - p.28b, l.21) からの援用である。

- (93) 宗密 (CE.780-841) 述『佛說盂蘭盆經疏』下に「少財三者。一鍼毛鬼。毛利如鍼行便自刺。爲貪利故。妄行鍼灸及刺畜生。但爲求財不愈疾故。二臭毛鬼。毛利而臭自拔受苦。●絲於販賣猪羊烹宰鵝鴨。湯爛刀剝●楚痛難堪。地獄罪終墮斯鬼趣。三大癭鬼。咽垂大癭自決噉膿。絲嫉妬於人常懷瞋恨故。多財三者。一得棄鬼。謂常得祭祀所棄食故。●絲於罪多福少少施多慳。棄擲之物●方惠施故。二得失鬼。謂常得巷陌所遺食故。以於現財常生慳著。疑欲失者●而方●捨故。三勢力鬼。謂夜叉羅刹毘舍闍等。」【T.39 p.509 脚註⑦】「絲於=以⑥*」【T.39 p.509 脚註⑧】「楚痛=痛楚⑥」【T.39 p.509 脚註⑨】「方+(能)⑥」【T.39 p.509 脚註⑩】「[而]-⑥*」【T.39 p.509 脚註⑪】「(起)+捨⑥」(T.39 no.1792 p.509a, Ⅱ.6-17) と類似する文例が見られる。両者に類似する文例が見られることから、宗密は、先行する慧淨の『續述』或いは『盂蘭盆經疏』より引用したものと考えられる。ただし、本箇所は、現存する慧淨の『[盂蘭]盆經讀述』には見当たらない。
- (94) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。若生天上至怨憎會苦者。此第五見後報苦。由非法求利。於人天中。受相似果。爲後報苦。」(Kor.1468 p.54-27v, Ⅱ.13-15) とある。
- (95) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「案此文三苦。貧窮者。多是偷盜相似果。愛離者。多是兩舌相似果。怨憎會者。多是惡口相似果。」(Kor.1468 p.56-28v, Ⅱ.7-9) とある。
- (96) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。如是等至沒在其中者。此第六見沈沒苦。」(Kor.1468 p.56-28v, Ⅱ.9) とある。
- (97) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「問。云何說取陰爲苦。答。苦盛逼故。如人大樂□□即苦。復次苦最大故。譬如射棚。是苦聚集深廣如海衆生不能得出。故曰。沒在其中。」(Kor.1468 p.57-29r, Ⅱ.2-4) とある。
- (98) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。歡喜遊戲至不以爲患者。此□□見迷惑苦。歡喜遊戲者。由愛多。不覺不知。□驚不怖者。由癡重。亦不生厭者。無智根。不求解脫者。少信力。東西馳走者。正沈苦集。不以爲患者。未忻滅道。」(Kor.1468 p.57-29r, Ⅱ.4-7) とある。
- (99) 『妙法蓮華經』「譬喻品」に「汝等莫得樂住三界火宅。●勿貪麁弊色聲香味觸也。若貪著生愛則爲所燒。汝速出三界。當得三乘聲聞辟支佛佛乘。我今爲汝保任此事。終不虛也。汝等但當勤修精進。」【T.9 p.13 脚註⑤】「勿=人⑥」(T.9 no.262 p.13b, Ⅱ.10-14) とある。
- (100) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「此即初章自有三意。一以苦器怖之。二以苦具怖之。三以苦力怖之。苦器是火宅。苦具是五欲。苦力是能燒。苦器汝勿住。苦具汝勿貪。苦力汝應捨。色聲香味觸言麁弊者。下界故麁。壞人故弊。智論云。衆生常爲五欲所壞。五欲者得之轉劇如火炙疥。五欲燒人如逆風執炬。五欲害人如踐惡毒。如蜜

塗刀舐者。傷舌。得時少樂失時大苦如此匱弊。汝勿貪著。」(Kor.1468 p.58-29v, l. 12 - p.59-30r, l.3) とある。引用文中、「智論云」の典拠は後掲の註参照。

- [illegible]

p.13 脚註**6**】「[性]－博」【T.9 p.13 脚註**7**】「愍念＝憫念(宮)」(T.9 no.262 p.13b, ll.18-29) とある。

- (105) 『大般涅槃經(北本)』卷第十八に「善男子。一切男女若具四法則名丈夫。何等爲四。一[●]善知識。二能聽法。三思惟義。四如說修行。善男子。若男若女具是四法則名丈夫。」【T.12 p.469 脚註⑥】「(近)+善(元明)」(T.12 no.374 p.469a, ll.24-27)と、同箇所が『大般涅槃經(南本)』卷第十六にも「善男子。一切男女若具四法則名丈夫。何等爲四。[●]一善知識。二能聽法。[●]三思惟義。四如說修行。善男子。若男若女具是四法則名丈夫。」【T.12 p.711 脚註⑬】「一+(近)(元明)」【T.12 p.711 脚註⑭】「三+(近)(元)」(T.12 no.375 p.711c, ll.25-28)とあり、本箇所からの引用と考えられる。

- (106)『妙法蓮華經續述』卷第五に「經曰。若有衆生至爲求牛車出於火宅者。次合菩薩四意。從佛世尊等是終。求一切智等是下種。是名大乘等是定性。如求牛車等是合成。然下種自有二意。一求通達卽四智。二求弘濟卽四恩。四智者。卽一切智。佛智。自然智。無師智。一切智是理智。佛智是如量智。無師智卽前二智不假教。自然智卽前二智住運起由行。四修滅。四障證。四斷異。四人成。四修者。一無間修。二恭敬修。三無餘修。四長時修。四障者。一解脫障。二定障。三一切智障。四永時障。四斷者。卽四。四人者。一凡夫。二聲聞。三緣覺。四菩薩。解脫障以見。以最道滅見道是最勝道此道猛利能一種九故爲最勝。若入見道行無修此障成一切智異天人凡夫無解脫故。定障以修惑。劣心爲體修惑障成就下劣心障現行此障以品類道滅修道是不猛利道九種故名品類若入修道行卽斷此障成無聞聞懈怠不盡得滅定故。一切智障以體以自對道無道唯菩薩自用名自不捨不得入修。若入解脫位斷四障具證四智此四智卽通達體通達用四恩以四愍爲體。謂慈悲喜捨。愍念者。是悲種惻苦爲愍記錄爲念。安樂者。是慈相令行善因爲安令得善果爲樂。無量衆有智慈悲境。利益天人者。令不墮三塗卽入有學位。度脫一切者。令出三界卽直三乘位若人求四通達及爲下種。」(Kor.1468 p.60-30v, l.11 - p.62-31v, l.8)とある。

- (107)『妙法蓮華經』「譬喻品」に「譬如長者 有一大宅 其宅久故 而復頽弊 堂舍
高危 柱根摧朽 梁棟傾斜 基陛^①墮毀 牆壁圯圯 泥塗^②灑落 覆苫亂墜 椽桷
差脫 周障屈曲 雜穢充遍 有五百人 止住其中 鴛鴦鸞鷖 烏鵲鳩鴿 虻蛇螻
蠅 蜈蚣蛇蟻 守宮百足 ③^④狎狸鼠鼯 諸惡蟲輩 交橫馳走」【T.9 p.12 腳註②】
〔墮=頽^傳〕【T.9 p.13 腳註①】〔灑=陶元明宮，=墮^傳〕【T.9 p.13 腳註②】〔狎

鼬宋、貍元明宮、狢狸=狢狸博 | (T.9 no.262 p.13c. 11.19-26) とある。

- (108)『妙法蓮華經續述』卷第五に「□□□□□□□□□□□□□□□□頌宅量三頌時
□□□□□□□□□□□□□□□□識一衆生有□□□□□□□□□□識是一□□□□
□□是衆生所有悉□□□□□□之中不出應□□□□□□□□一佛乘所攝卽是如來所有。
故言長者有一大宅□□□□化衆生。卽一衆生是一大宅若能化□□□□□□□□來有
多大宅。其宅久故者。頌時節衆生本識有來無始故□久。體是無常敗壞□□之性故言故。
而復頓弊者。頌□□□□同發故言頓。□□□□□□故言弊。次兩偈□□□□□□患兩偈
頌無常半□□□□□□□□八句。卽爲八生。堂舍高危者。是頭老相柱」(Kor.1468
p.64-32v. 11-10) とある。

- (109) 『妙法蓮華經續述』卷第五に「貪初六鳥譬食貪後二鳥。又前六譬出家在家人貪鵲鸛鷺食貪者。智度論。無愧無慚饕餐因緣故。受鳥鵲鷺諸鳥之形。又譬出家欲情重無明偏之屬。姪欲罪故次一偈半譬瞋一句彰過患後熾盛名體三品品瞋。次兩虫譬中品瞋。後五虫譬下品瞋。虻反蛇類也。蝮爾雅云蝮虺也。此等譬瞋者。智度論多故受毒蛇蝮歌蜂百足含毒之虫。」(Kor.1468 p.65-33r, L11 - p.66-33v, L6) とある。

- (110) 『大智度論』卷第十六に「無愧無慚^⑤饗餐因緣故。受烏鵲鴛鴦諸鳥之形。」【T.25 p.175 脚註⑤】「饗=餐^⑥」（T.25 no.1509 p.175a, ll.25-26）とある。

- (111) 『大智度論』卷第十六に「瞋恚偏多。受毒蛇蝮[●]蝎蚊蜂百足含毒之虫。」【T.25 p.175 脚註⑩】「蝎=蠍(元明)」(T.25 no.1509 p.175a, l.19) とある。

- (112) 以下欠。

- (113)『續高僧傳』卷第三の「唐京師紀國寺沙門釋慧淨傳三」に「貞觀二年新經既至。將事傳譯。下勅所司搜選名德。淨當斯集。筆受大莊嚴論。詞旨深妙曲盡梵言。宗本既成。并續文疏爲三十卷。義冠古今。英聲[●]藉甚。」【T.50 p.442 脚註29】「藉=籍[㊦]」(T.31 no.1604 p.442c, // 25-29)とある。

- (114) 前稿の註 (13)－(17) 参照。このほかに、『大乘莊嚴經論』卷第八に「釋曰。四攝種差別有三。謂下中上。由諸菩薩攝三乘人差別故。由此三種差別次第復有三益。一倍無益二倍有益。三純有益。倍無益者。謂解行地菩薩攝。倍有益者。謂入大地菩薩攝。純有益者。謂八地已上菩薩攝。由彼決定能令衆生成就故。」(T.31 no.1604 p.634a, II.5-10) と、また、『妙法蓮華經續述』卷一に「彼岸者。謂佛眞實智。是大寶所。故名彼岸。化無不成。故名眞實。莊嚴論說。地前菩薩化倍無益。初七地菩薩化倍有益。八地已去化純有益。如彼論續述中解。此諸菩薩到佛彼岸。故究竟淨。」(Kor.206 p.74-35r, II.2-5) と『大乘莊嚴經論』からの引証が見られる。ま

た、『續述』の引用文中、「彼論續述中解」とあることから、『續述』は『大莊嚴論文疏』三十巻以降の撰述であることが判る。

- (115) 『續高僧傳』巻第三の「唐京師紀国寺沙門釋慧浄傳三」に「皇儲久餐德素。乃以貞觀十三年集諸[●]官臣及三教學士於弘文殿。延浄開闡法華。道士蔡晃講[●]論好獨秀。[●]玄宗下令遣與抗論。晃即整容問曰。經稱序品第一。未審序第何分。浄曰。如來入定徵瑞放光現奇動地雨花。假遠開近。爲破二之洪基。作明一之由漸。故爲序也。第者爲居。一者爲始。序最居[△]先。故稱第一。晃曰。第者弟也。爲[●]第則不得稱一。言一則不得稱第。兩字[●]矛盾何以會通。浄曰。向不云乎第者爲居。一者爲始。先生既不領前宗。而謬陳後難。[●]便是自難。何成難人。晃曰。言不領者請爲重釋。」【T.50 p.444 脚註②】「官=宮[㊦]」【T.50 p.444 脚註③】「(道)+論[㊦]」【T.50 p.444 脚註④】「玄=高[㊦]」【T.50 p.444 脚註⑤】「第=弟[㊦]」【T.50 p.444 脚註⑥】「牟=矛[㊦]」【T.50 p.444 脚註⑦】「便=使[㊦]」(T.50 no.2060 p.444a, Ⅱ.10-22)と、また、『妙法蓮華経續述』巻一に「序者由義漸義。如來入定徵瑞放光現奇動地雨花。假遠開近。爲破二之洪基。作明一之由漸。故名爲序。品者類義別義。此經總曰妙法蓮華。別有二十八類條。緒各異義例區分。故名爲品。第者爲居。一者爲始。此經一部二十八章。序最居[△]始。故稱第一。」(Kor.206 p.7-1v, Ⅱ.5-10)と一致する文例が見られる。
- (116) 『續述』(『論義』)との対応箇所に限る)に見られる旧訳の引用文例 — 『俱舍論』二例：前稿の註(64)・本稿の註(91)、『婆沙論』四例：前稿の註(38)・(71)・本稿の註(66)・(103)、『攝大乘論』二例：本稿の註(47)・(79)。
- (117) (拙稿[2011] p.84) 参照。
- (118) (佐藤心岳[1972] pp.1147-1148) 参照。
- (119) 『續高僧傳』巻第三の「唐京師紀国寺沙門釋慧浄傳三」に「武德初歲。時爲三府官[●]寮上上咸集延興。京城大德競陳言論。有清禪法師。立破空義。聲色奮發厲逸當時。相府記室王敬業。啟上曰。登座法師義鋒難對。非紀国慧浄無以挫其銳者。即令對論。」【T.50 p.442 脚註②】「寮=僚[㊦]」(T.50 no.2060 p.442c, Ⅱ.14-19)とある。よって、貞觀十年以降に紀国寺に住したという見方(佐藤心岳[1969] pp.727-728)は誤り。
- (120) 『續高僧傳』巻第三の「唐京師紀国寺沙門釋慧浄傳三」に「至貞觀十年。本寺開講。」(T.50 no.2060 p.443a, Ⅱ.4)とある。
- (121) 『問答』の以下の20問答「(5/2-1) (9/2-5) (15/3-1) (16/3-2) (17/3-3) (18/3-4) (20/3-6) (21/3-7) (22/3-8) (23/3-9) (26/3-12) (31/3-17) (41/6-3) (49) (51) (53) (56) (66) (68) (88)」は『論義』にほぼ一致する。『論義』に抄出されない『續述』は調査の対象外としたため、実数は増える可能性が高い。
- (122) (矢吹慶輝[1960] pp.1-2) 参照。矢吹慶輝博士がことさらに草書体で読み難い

『問答』を選び、『大正新脩大藏經』の古逸部に収録したのも、既存の法華章疏とはいくぶんか相違あることを見抜いていたからのことであろう。正しく先見之明というに相応しい。

- (123) ①～②は筆者推定の撰述年順。〔…〕：書名・巻数の初出。(…)：テキストの所在。
- (124) 『●金剛經疏』に「七似者。一似母。二似父。三似善友。四似同侶。五似健奴。五六似閤梨。七似和上。此七各有五業。合三十五種饒益。如法華讀述中說。由菩薩能具六真七似。能利益衆生故。言爲利益一切衆生應如是布施也。」【T.85 p.129 脚註②】『●大英博物館藏燉煌本, S. 2050, 首題新加』(T.85 no.2738 p.130c, l.26 - p.131a, l.1) と「法華讀述」からの引用が指摘(平井有慶 [1971] p.49・[1972] p.146) されているため、『金剛經疏』(≡『金剛般若波羅蜜經註』)は『續述』以降の撰述とも考えられるが、本箇所は『金剛般若波羅蜜經註』には見当たらないため、さらに検討を要する。なお、『續述』・『論義』に本箇所と一致・類似する文例は見当たらない。
- (125) 詳しくは、(金子寛哉 [1997a] p.56, p.63 註(11)) 参照。
- (126) 『大乘莊嚴經論』の世親釈については、(宇井伯壽 [1961] pp.1-2) 参照。
- (127) 前掲の註(91) 参照。
- (128) 前稿の註(7) 参照。
- (129) 作者未詳『●法華經玄贊釋』に「淨法師解信云。心決定爲信體。口決定爲信相者。此義不然。法相錯矣。准百法論中。夫決定者。即當勝解爲體。夫信者。乃以清淨爲體。故知錯也。」【SZ.34 p.940 脚註①】「此書久埋敦煌沙中迨清朝末發掘之恨失冠頭今姑安首題待後來是正玄贊卷一中第二明經宗旨」(SZ.34 no.639 p.943c, ll.16-19) と、また、『妙法蓮華經續述』卷一に「經曰。如是者。信成就。信以決定爲義。一能決定是阿難信。二所決定是如來法。阿難信有兩。一心決定。二口決定。心決定爲信體。口決定爲信相。夫信爲入道之初宗。」(Kor.206 p.8-2r, ll.13-15) とある。二例のうち一例は前稿の註(28) 参照。
- (130) (1)中算撰(CE.X)『妙法蓮華經釋文』卷上に「序品……經……(惠浄云。一徑也。)」(T.56 no.2189 p.144c, l.6) と、また、『妙法蓮華經續述』卷二に「經者。徑也。」(Kor.206 p.126-20r, ll.13-14) と、(2)『妙法蓮華經釋文』卷上に「序品……偈……(若依惠浄不是。梵語一者竭也盡也。四句圓足。義勢周盡故。)」(T.56 no.2189 p.148b, l.1) と、また、『妙法蓮華經續述』卷二に「今謂偈是漢語。偈者竭也。竭者盡也。四句圓足。義勢周盡。故名爲偈。」(Kor.206 p.123-18v, ll.4-5) と、(3)『妙法蓮華經釋文』卷上に「序品……聖主(惠浄云。佛於三聖最大。故稱——。)」(T.56 no.2189 p.148b, l.21) と、また、『妙法蓮華經續述』卷二に「言聖主者。中論中說。聖有三種。一外道五通。二辟支羅漢。三法身菩薩。佛於三聖最

大。故稱爲主。」(Kor.206 p.126-20r, Ⅱ.7-9) と、(4)『妙法蓮華經釋文』巻中に「譬喻品……自欺……(惠浄云。責已之詞也。)」(T.56 no.2189 p.155a, Ⅱ.3-4) と、『妙法蓮華經續述』巻五に「自欺者。是責已之辭。自作自憫是自欺也。」(Kor.1468 p.14-6v, Ⅱ.8-9) と、(5)『妙法蓮華經釋文』巻下に「囑累品(正法華。添品法華。——論。法華儀軌。竝慧浄。靈範。慈恩。玄範。道策。憬興。利貞。慧沼。皆以此品安普賢品後。吉藏天台安神力品後焉)」(T.56 no.2189 p.168c, Ⅱ.13-14) と、(6)『妙法蓮華經釋文』巻下に「妙音菩薩品……鉢……(慧浄云。梵云一。唐云器也。)」(T.56 no.2189 p.169b, Ⅱ.17) と、(7)『妙法蓮華經釋文』巻下に「妙音菩薩品……檢……(慧浄云。拘束爲一)」(T.56 no.2189 p.169c, Ⅱ.12-13) と、(8)『妙法蓮華經釋文』巻下に「陀羅尼品……毘陀羅……(慧浄云。黑色鬼也)」(T.56 no.2189 p.171b, Ⅱ.9) とある。

(131) (上山大峻 [2009] p.75) 参照。

(132) (拙稿 [2008] p.9) 参照。

〈参考文献〉

- 金 炳坤稿 [2011] 「法華章疏における五分釈の展開」(『印度學佛教學研究』59-2、pp.83-86)
- 大竹 晋校註 [2011] 『法華經論・無量壽經論 他』[新国訳大蔵經 インド撰述部【釈經論部】⑭-18] (大蔵出版、東京)
- 金 炳坤稿 [2010] 「紀国寺慧浄の『法華經續述』考(1) 新発見の史料をもとに」(『身延論叢』15、pp.109-146)
- 上山大峻稿 [2009] 「出土文献と仏教史研究 敦煌資料研究からの発言」(『佛教史學研究』52-1、pp.70-98)
- 金 炳坤稿 [2008] 「敦煌漢文文献「法華經疏」に関する一考察(経過報告)」{立正大学仏教学部平成19年度国外研修事務局編 [2008] 『平成19年度地域仏教研修(三) B 報告書 ヨーロッパ仏教学の源流と比較文化研修』(立正大学仏教学部、東京、pp.9-13)}
- 中西久味稿 [2008] 「唐の紀国寺慧浄撰とされる『孟蘭盆經讃述』『般若心經疏』について」(『人文科學研究／新潟大學[人文学部]』122、pp.95-111)
- 金子寛哉稿 [2002] 「念仏別時意説 群疑論の所説を中心に」(『印度學佛教學研究』50-2、pp.653-658)
- 金子寛哉稿 [1997b] 「浄土の三界摂不摂論について」(『印度學佛教學研究』45-2、pp.755-759)
- 金子寛哉稿 [1997a] 「唐代初期における仏教と道教の論争 紀国寺慧浄の対道教説を中心に」(『日本仏教学会年報』62、pp.47-64)

- 伊吹 敦稿 [1992]「般若心経慧浄疏の改変にみる北宗思想の展開」(『佛教學』32、pp.41-67)
- 福井文雅稿 [1986]「『般若心経』慧浄疏と智詵疏の敦煌写本照合」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』31、pp.29-37)
- 春日礼智稿 [1982]「仏教資料としての新唐書芸文志」(『印度學佛教學研究』30-2、pp.781-784)
- 小寺文穎稿 [1974]「凝然大徳にみられる利渉戒疏」(『印度學佛教學研究』22-2、pp.691-697)
- 佐藤心岳稿 [1972]「隋唐時代における『法華経』の研究講説」{恵谷隆戒先生古稀記念会編 [1972]『浄土教の思想と文化 恵谷隆戒先生古稀記念』(仏教大学、京都、pp.1135-1159)}
- 平井宥慶稿 [1972]「敦煌本金剛経疏と唐慧浄」(『印度學佛教學研究』21-1、pp.146-147)
- 福井文雅稿 [1972]「般若心経慧浄疏の敦煌新出写本 慧浄疏第十門の発見」(『大正大學研究紀要 文學部・佛教學部』57、pp.279-292)
- 平井宥慶稿 [1971]「敦煌資料より知られる唐紀国寺慧浄法師の一面」(『豊山学報』16、pp.39-71)
- 柳田聖山稿 [1971]「北宗禅の一資料」(『印度學佛教學研究』19-2、pp.127-135)
- 岡部和雄稿 [1970]「敦煌本『孟蘭盆経續述』の性格」(『印度學佛教學研究』18-2、pp.526-530)
- 中田萬善稿 [1969]「敦煌文獻の再検討 特に弘忍の修心要論について」(『印度學佛教學研究』17-2、pp.714-717)
- 佐藤心岳稿 [1969]「唐代における『勝鬘経』の流布について」(『印度學佛教學研究』17-2、pp.727-730)
- 牧田諦亮稿 [1961]「唐長安大安國寺利渉について」(『東方学報/京都大学人文科学研究所』31、pp.321-330)
- 宇井伯壽著 [1961]『大乘莊嚴經論研究』(岩波書店、東京)
- 矢吹慶輝稿 [1960]「敦煌文書の意義」(『大正新脩大藏經會員通信』4、pp.1-2)
- 小川貫次稿 [1958]「『般若波羅蜜多心経疏』解題」{西域文化研究会編 [1958]『敦煌佛教資料/西域文化研究』第一(法蔵館、京都、pp.85-87)}
- 西域文化研究会編 [1958]「(擬題) 般若波羅蜜多心経疏」{西域文化研究会編 [1958]『敦煌佛教資料/西域文化研究』第一(法蔵館、京都、pp.79-84)}
- 旅順博物館・龍谷大学編著 [2006]『旅順博物館蔵トルファン出土漢文仏典断片選影』(法蔵館、京都)
- 磯部彰編 [2005]『台東区立書道博物館所蔵中村不折旧蔵禹域墨書集成』中(二玄社、東京)

紀国寺慧浄の『法華経續述』考(2) (金)

- 藤枝晃編著 [2005] 『トルファン出土仏典の研究 高昌残影积録』 (法蔵館、京都)
 海古籍出版社、上海圖書館編 [1999-] 『上海圖書館藏敦煌吐魯番文獻』 第②冊 (上海古籍出版社、上海)
 鎌田茂雄 [ほか] 編 [1998] 『大藏経全解説大事典』 (雄山閣出版、東京)
 中田篤郎編 [1989] 『北京圖書館藏敦煌遺書総目録』 (朋友書店、京都)
 黄永武主編 [1981-1986] 『敦煌寶藏』 全140冊 (新文豐出版、臺北)
 藤枝晃編 [1978] 『高昌残影 出口常順蔵トルファン出土仏典断片図録』 (法蔵館、京都)
 商務印書館編 [1962] 『敦煌遺書總目索引』 (中華書局、北京)
 龍谷大學圖書館編 [1936] 『龍谷大學圖書館善本日録』 (龍谷大學出版部、京都)

〈付録〉異体字・旧字体一覧

1-340d	1-350b	1-403d	1-458c	1-685b
久 → 久	乗 → 乗	乱 → 亂	𠂔・牙 → 互	但 → 但
1-690b	1-710c	1-740c	1-813c	1-846c
任 → 住	仏 → 佛	来 → 來	俱 → 俱	偷 → 偷
1-1065d	2-130b	2-271a	2-352d	2-462c
両 → 兩	冥 → 冥	尅 → 剋	劒 → 劍	市・迺 → 匠
2-639c	2-953a	2-1097b	2-1190b	3-93d
即 → 卽	咒 → 呪	喻 → 喻	嘱 → 囑	圓 → 圓
3-250c	3-274d	3-571c	3-985c	3-1114b
増 → 增	壊 → 壞	奇 → 奇	亘 → 宜	寶 → 寶
4-18b	4-100a	4-173a	4-481a	4-529a
将 → 將	尚 → 尙	属 → 屬	幌 → 幌	幼 → 幼
4-809d	4-880c	4-921c	4-1051b	4-1089a
役 → 役	促・從 → 從	德 → 德	悦 → 悅	恵 → 惠
4-1093b	4-1101a	4-1180d	4-1217c	5-39b
悪 → 惡	惚 → 惱	怜 → 憐	懷 → 懷	戦 → 戰
5-44b	5-208a	5-343b	5-408b	5-423a
戯 → 戲	梲 → 拷	揺 → 搖	撃 → 擊	挙・拳・擧 → 擧
5-447a	5-502b	5-648d	5-676a	5-712b
攝 → 攝	教 → 教	断 → 斷	於 → 於	既 → 既
5-763d	5-937c	6-26a	6-68c	6-226b
朋 → 明	曉 → 曉	卒 → 本	几・凡 → 机	枕 → 枕
6-471a	6-484b	6-506d	6-605b	6-652a
栢 → 楮	榮・策 → 榮	楽 → 樂	權 → 權	歛 → 歛
6-710c	6-752a	6-963d	6-984d	7-55a
歳 → 歲	残 → 殘	沉 → 沈	没 → 沒	清 → 清
7-83b	7-159d	7-349b	7-377d	7-426a
浅 → 淺	温 → 溫	灌 → 灌	灾 → 災	无 → 無

紀国寺慧浄の『法華経續述』考(2) (金)

7-470c 煮 → 煮	7-523d 焼 → 焼	7-571a 為 → 爲	7-585d 尔・尔 → 爾	7-592b 墙 → 牆
7-902d 玼 → 珍	7-1041d 産 → 産	7-1092b 留 → 留	7-1145b 䟽 → 疏	7-1218a 発 → 發
8-93c 文 → 皮	8-121d 盗 → 盜	8-197a 真 → 眞	8-250a 脛 → 脛	8-372b 碎 → 碎
8-428c 秘 → 祕	8-498a 禪 → 禪	8-623a 蕰 → 穌	8-635d 穩 → 穩	8-775b 筋・筋 → 筋
8-780c 苔 → 答	8-792d 萌 → 節	8-799b 竿・筭 → 算	8-1056d 統 → 統	8-1071c 経 → 經
8-1123b 縁 → 緣	8-1161b 惣・惣・総 → 總	8-1188a 縄 → 繩	8-1191c 繫 → 繫	8-1216b 績 → 績
9-234a 聴 → 聽	9-246b 穴 → 肉	9-324b 脱 → 脫	9-388b 卧 → 臥	9-441d 与 → 與
9-463d 舍 → 舍	9-739b 万 → 萬	9-845c 盖・楹 → 蓋	9-978b 蔵 → 藏	9-1063a 虚 → 虛
9-1079d 号 → 號	10-1a 虫 → 虫	10-188a 祇 → 祇	10-346a 観 → 觀	10-484a 説 → 說
10-614c 変 → 變	10-626b 讚 → 讚	10-785a 賤 → 賤	10-792c 頼 → 賴	10-841c 趁 → 趁
10-925b 躰 → 踊	10-928a 踐 → 踐	10-1004b 𪛗 → 軟	10-1022d 軽 → 輕	10-1037d 輩 → 輩
10-1087a 辞・辞 → 辭	11-22d 述 → 述	11-170b 遅 → 遲	11-379a 醉 → 醉	11-558d 録 → 錄
11-612d 鎮 → 鎮	11-659c 鑽 → 鑽	11-733d 閒 → 間	11-769d 関 → 關	11-814d 陀 → 陀
11-910d 陷 → 陷	11-961c 随 → 隨	11-969d 隠 → 隱	12-85d 霊 → 靈	12-98a 青 → 青
12-126c 静 → 靜	12-140a 面 → 面	12-242a 湏 → 須	12-295a 顛 → 顛	12-381d 飲 → 飲
12-584a 軀・體 → 體	12-588c 高 → 高	12-1054d 鼓・鼓 → 鼓	12-1006d 黒 → 黑	

〈キーワード〉

慧浄、栖復、『妙法蓮華経續述』、『妙法蓮華経論義』、『法華経玄賛要集』、『法華問答』

〈謝辞〉

韓国に、慧浄述『妙法蓮華経續述』が現存するとご教示下さった韓国の社団法人法華弘通会の申皓均(圓鏡)法主と、原本の画像データ(巻五・六)を快く提供して下さいだった松廣寺聖宝博物館館長古鏡上人とに深く御礼申し上げます。また、本稿の執筆にご指

紀国寺慧浄の『法華経續述』考(2) (金)

導頂いた恩師三友健容教授（立正大学）、藤井教公教授（北海道大学）、高橋堯英教授（立正大学）、福土慈稔教授（身延山大学）にも深く感謝申し上げる次第である。